茜空と超能力シャ

黒崎 千叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
茜空と超能力シャ

【Ｎコード】
Ｎ５０１９Ｍ

【作者名】
黒崎　千叉

【あらすじ】
世界を巻き込んだ大規模地震。
そのときに発生した空間の『歪み』。
そしてその向こうにいた『モノ』は魔法をあやつる生物だった。
彼らと『契約』を結ぶことによって『未知の力』を手にいれ、超能力者となった多くの人々。

そして日本に建てられた、『超能力者だけが入学できる高校』。

そこに通う主人公、「霧間麻人」が二年生となったとき

非現実は加速を始めた。

※この物語はフィクションであり、実際の人名、地名、団体などとは一切関係ありません。

ある科学者の日記

――月―日

異世界はある。
この言葉がクレイジー思想から常識に変わって早くも数年がたった。
大地震によって発生したと言われている歪み、そのむこうの異世界にいた進化生物、『クリーチェスト』と契約を結ぶ人々の数も年々増加し、日常生活、法律までもが変わってきている

今朝のニュースでは、クリーチェストと契約を結んでいる学生だけが通うことのできる高校の建設が始まった、と報道していた。

未来への希望をつくる、というだけならいいが、どうもその学校には日本の法律が適用されず、校則が全てとなるらしい。

もしも私に子供ができたなら、そんなところには行かせたくはないな。

私はただ、彼らの力によって紛争が起こらないことを切実に願っている。

そしてそのために、私は研究しているのだ。

…誰かが来たようなので今日はこれで終わりにする。
明日は、良い研究の成果を書きたい。

それではよい夜を。

黒髪の少年の夕暮れ

春の夕暮れに、カラスが鳴いている。
茜色、と言うよりは紅色に染まる空を背景に、どこか物寂しそうな声で、そして何かを警告するような声で。

彼らが溶け込む雲は、落ちかけの太陽の光を反射し、赤く輝いている。

そんな場所からカラス達が見ているものは、ある高校の体育館裏にいる六人の人影だった。

五人が一人を取り囲み、とても仲良しこよしなんて雰囲気は微塵も感じられない。
一発触発…まさにその言葉が適している。

円の中心で囲まれている、少し身長の高い少年は怯えるようすもなく、ポケットに手を突っ込んでいる。

少年の瞳は、どこか面倒くさそうに、呆れたようにも感じられるだろう。
取り囲んでいる柄の悪い一人の男が言った。

「おい！『G』ランクの霧間（キリマ）　麻人（アサト）！先日はうちの部下をこっぴどくやってくれたそうじゃないか。」

そう言われた少年、改め霧間麻人はショートとミディアムの中間くらいの黒髪をガッとかきあげ、一般人よりも整った顔立ちをさらしながら言った。

「こっぴどくやったって、先に手を出してきたのはあんたの部下とやらだぞ？廊下歩いてたら、ドンってぶつかって、謝ったら殴ってきたから…。」

正当防衛だ、と彼は言いたいのだろう。
視線を少し下にむけて話すその姿からは、彼の言葉とおり反省の色はない。
もっとも、霧間は反省する必要などないのだが。
「黙れ！どんな理由であろうともうちの部下がやられたのは事実だ！それなりの覚悟はできているんだろうな？」

男はそんな霧間に対して先ほどとは比べものにならない大きな声をあげた。
同時に変わる目つき。
ただでさえ悪い目つきをしているのに、さらに歪んだ顔になった。

それは周りの男たちも同じと言ってもいいだろう。

『殺気』という言葉が、痛いほどピッタリと似合う。
そして男は右腕を伸ばしたまま、肩の高さにもってきた。

その手は最大限に開かれ、それは『何か』を掴もうとしているように見える。

そして次の瞬間、男の手の上の空間から『それ』はゆっくりと出てきた。それは空気と空気を掻き分けるようにして、ゆっくりと確実に姿を表す。

霧間が目にしたのは、刃渡り６０センチほどのサーベルだった。

まさに西洋の騎士が使っているようなモノ。

違っているところといえば、それは『風を纏っている』ということだ。

この世の物じゃないことくらい、保育園児にもわかるだろう。

続いて他の四人も同じようにサーベルを取り出す。

そう、彼らはたった今、『契約しているクリーチェストからサーベルを借りた』のだ。

これは異世界の進化生物、『クリーチェスト』と契約を結ぶことによって得られる能力の一つであり、他には『召還』と『融合』がある。

そしてこの能力『転送』は、契約しているクリーチェストの所持品、および魔力を異世界からこちらの世界へ転送してもらうというものだ。

この行為自体は人体にほとんど負担がなく、能力の中では最も容易にできると言えよう。

現在、カラスもすっかりいなくなった空の下、五人の男が何も所持していない一人の少年、霧間麻人を囲んでいる。

はたから見れば、まさに彼は絶対絶命。そう思えるだろう。しかし霧間はフウッと小さなため息をついて言った。

「『風の戦士のサーベル』か…。なあ、俺の幼なじみが言ってたけど、そんなただの下級戦士のサーベルは全然強くないって…。」

霧間はまるでこの武器の性能を知っているかのような口ぶりだった。

男はこの言葉に対して眉間にシワを寄せる。

「うるせぇ！俺たち『F』ランクでも数が多けりゃ何だってできんだよ！おい、やっちまえ！」

その言葉が火蓋を切り、霧間麻人の右側にいた男が「待ってました」といわんばかりのスピードで、霧間に斬りかかった。

サーベルを上に掲げ、今にも降り下ろそうとしている。

鋭く光り、風を纏うその刃は掠めただけで間違いなく身を切り裂くだろう。

しかし、霧間はそんなモノを恐れることなく、彼に走り寄る男の腹に痛烈なミドルキックを喰らわせた。

「ガハァッ……。」

さきほどの勢いとは逆に、その場に力なく倒れるその男。

腹を押さえて失神するその姿を見て、霧間はその男が戦闘不能であると判断した。

「てめぇ！！」

休む暇もなく、次に左側にいた男と右後ろにいた男二人が斬りかか

った。

左からのサーベルは、風を纏いながら周りの空気を切り裂き、霧間の頭部を切ろうと迫る。

が、彼は先ほどと同様、全く焦ることもなく、その場にしゃがんで攻撃を避ける。

頭上をサーベルが駆け抜け、刃と化した風が髪の毛を少し切ったのを霧間は感じた。

「後ろにもいるぞ！？」

これを狙っていたかのように、背後に回り込んだもう一人の男が、霧間の足首に高さをあわせて横から地面すれすれにサーベルを繰り出す。

しかし、

「お見通しだ。」

霧間はそう言ってしゃがんだ状態から身を回転させながら、小さくジャンプした。

空中で彼の体は頭の先からかかとを軸にし、完全に地面と平行となって回りながら浮いている。

そして攻撃をかわした彼は素早く体勢を立て直し、先にサーベルを振って体の流れた隙だらけの男の腹に蹴りを打ち込む。

低いうなり声を上げて倒れるその男。
――――喰らえ！
振り向き様に後ろの敵を蹴飛ばす。
二メートルほど飛び、男は動かなくなった。
――――あと二人…！
霧間麻人は相手の不意をつき、左後ろにいた男に蹴りを喰らわせた。
「ぐふっ……。」
いきなりの攻撃に対処することができず、男はあっけなく崩れ落ちた。
はたから見れば危機的状況だったが、数秒間でタイマンという対等の立場となった。
目の前で四人の仲間があんまりにあっさりとやられてしまったからか、残ったリーダーらしき男は動揺を隠すことができない。
「あとはあんただけだぜ？」
霧間麻人は前を向いてその男と向き合った。
その瞳は自信に満ち、勝利を核心していた。
一方、男は少しの間うつむき、そして、
この世が終わるかのような恐怖に震えるような顔を上げ、言った。

「くっそ……こうなったらかなりリスキーだが……『召還』してやる！」

ピクッとその言葉に反応する霧間。

―――『召還』…契約しているクリーチェストを、『こちらの世界に呼び出す』！

「お前！わかってるのか！？Ｆランクごときが契約相手を呼び出すことの『危険性』を！」

霧間は口調を少し強めて言った。

しかし男は全く聞く耳を持たず、右膝を地面につき、紫の唇を動かして『何か』を唱えた。

次の瞬間、その場に木枯らしが巻き起こった。

地面に転がる葉っぱや小枝などを踊らせ、周りの空気を巻き込んでいる。

そして、一瞬、

まるで燕が宙に漂う虫を捉えるような、刹那的な時間で、いやに生暖かい風がその場を制した。

そして、

―――これはちょっと不味いんじゃないかな？

霧間麻人は突如目の前に現れた『それ』を見て思った。

彼の視界に映ったのは、銀の鎧を身につけた戦士だった。
身の丈は１８０センチほどだろうか。
顔は甲冑をしているため、霧間だけでなく他の誰からも見えることはないだろう。
しかし、霧間麻人には断言できることがあった。
この生命体は、『明らかにこの世のものとは違う』。

そしてこいつこそが、『男が契約しているクリーチェスト』だと。
おそらく、『風の戦士』と思われる敵が増え、男が断然有利になったと言えよう。

しかし、男は契約相手である風の戦士になぜか恐怖の色を見せている。

また、風の戦士もそんな男をまじまじと甲冑の中から見つめいる。

「馬鹿！早く逃げろ！」

叫んだのは霧間麻人だった。
対象はもちろん男。

が、次の瞬間、

「かっ……。」

布を切り裂くような音は一切聞こえず、何か固い繊維を引き裂くような音を霧間は聞いた。

そしてそんなものよりも耳に残る、男の断末魔の吐息。

そう、召還主である男は、召還相手である風の戦士に胴体を切り裂かれたのだ。赤い鮮血がたちまち地面を染め、嫌な人間の臭いが周囲に立ち込める。

さきほど霧間麻人が言った『危険性』とは、まさにこのことなのだ。

彼らが用いているアルファベット、『G』や『F』は、『契約している人間のレベル』をさし、そのレベルの測定は彼らの通う『クリーチェストと契約しているものだけが入学できる』高校、榊山高校で、定期的に試験のような形で測定される。

『A』ランクが最高レベルで『G』ランクが最低レベルとされており、通常の場合、契約相手を召還し、『自由に指示する』ならば、最低でも『C』ランクでないと不可能とされている。

それ以下のランクの者が召還していまうと、例外を除き、レベルの低さにクリーチェストが反抗して、さきほどの男のような末路を辿ることになってしまうだろう。

男を斬った戦士は霧間麻人の方を向いた。

甲冑をしているため、霧間は化け物の表情をつかむことができない。

ただわかっていることは、このまま何もしなければ霧間麻人も今や無惨に転がる男と同じ運命となることだ。

———まったく、厄介なモン残してくれたもんだぜ…。

霧間はただただ苦笑した。
その笑みは自分自身に、あっけなく殺された男に、そして目の前にたたずむ銀の鎧の化け物、『クリーチェスト』に向けられた。

最弱者の未知の能力

今現在自分のおかれている状況を、霧間麻人は考えてみた。

いや、考えるまでもなく、『不利』という言葉を使わざるをえないだろう。

一般的に、クリーチェストをクリーチェスト以外の力、すなわち個々に備わった体術を駆使して倒すのは、極めて困難とされている。

その要因の一つとして、『力の違い』があげられる。

霧間麻人の身長は、約１７７センチほど、対して相手は１８０センチほどだ。

ほとんど変わらないじゃないか、と思う人もいるだろう。

しかし問題となってくるのが、その体に秘められた『魔力』なのだ。

研究より、一般人も多少の魔力を持っていることが証明されている。

もちろん個人差があり、膨大な魔力を持つ人もいれば、せいぜい虫を殺すのが精一杯、という人もいる。

ただ、人は魔力の使い方を『知らない』。

まさに、宝の持ち腐れ、とはこのことを言うのだろうか。

いくら自分の意思で魔力を操ろうと試みたところで、『脳に魔力を使う機能が備わっていない』ため、使えないのだ。

そして仮に人間が魔力を使えたとしよう。

自由に操ることができ、炎なんかを出すことができたとする。

しかし、その魔力は『クリーチェストの魔力の半分以下』に過ぎない。

そのため、一般人は魔法を使った攻撃をしてくる生物に対して、生身の握りこぶしで挑まなければいけない。
これはボクシングで、ライト級の選手がベビー級の選手に立ち向かうよりも無謀だと言えよう。

そして、霧間麻人は今、そんな絶望的な状況に陥っているのだ。

ならば、霧間も男達のように『契約しているクリーチェストから何らかの武器』を借りる必要があるだろう。
それができれば、その武器と彼の戦闘能力をもってして、目の前の殺人生物をなんとかすることができる。

が、霧間麻人にはそれができない。

普通、クリーチェストから武器を借りる場合は、『その借りるモノを明確にする』必要がある。
例えば、今回の男達の場合は、『風の戦士のサーベル』と、明確にしてこちらの世界に転送してもらっている。

霧間の弱点、彼がGランクと言われる原因は、ここにある。

霧間麻人は、自分が契約しているクリーチェストが、どこの何モノで、どんな武器を持っているのか、どんな特殊能力を使えるのか『知らない』のだ。

普通は「ありえない」、と言われるだろう。
実際、霧間はそう言われながら今まで生きてきた。

なぜ霧間麻人は、自分のパートナーとなるはずのクリーチェストを知らないのか、それは彼も覚えのない『過去』に原因があった。

霧間麻人という男は、物心がついたころには『すでに契約していた』のだ。

いや、『契約させられていた』、という表現の方が適切だろう。

おそらく、霧間とクリーチェストに契約させたのは、彼の両親だ。

しかし、霧間に物心がついた頃にそばに居たのは、両親ではなく親戚のおじさんだった。

そう、霧間麻人の両親はすでに死んでいた。

それは、彼の契約相手の正体を闇に葬りさった、とも言える。

そのため、霧間は一般に契約している人間のような戦闘はできない。

しかし、神はどうやら彼を完全に見捨ててはいなかったようだ。

霧間は、契約している姿形わからぬクリーチェストから、『魔力』を体に宿すことができるのだ。

そしてクリーチェストの『強大な魔力』を取り込んだ脳は一時的に活性化し、『体内の魔力を自在に操る』ことができる。

しかし、脳の一時的な活性化による副作用は大きく、使用後は体が急激に重くなってしまう点がデメリットと言える。

ちなみに、この能力を使える人間は極めて希であり、この高校でもこれを使えるのは霧間麻人ただ一人なのだ。

――――やるっきゃないよな。

霧間は心の中で決し、そして拳を握りしめた。

刹那、彼の周りの枯れ葉や小枝が吹き飛んだ。
それは風で飛んだようではなく、『何か』に弾かれたようだった。
磁石の同じ極同士が反発するように、勢いよく宙を舞う。
そして、おそらくそれらを飛ばした『モノ』は、霧間を取り巻く『魔力』だろう。
少し透明の白い衣を身に纏ったような、『霧間麻人』がそこにいた。
確実に言えることは、霧間の表情は変わらないものの、彼は今や人間ではなく、魔力を操る『超能力シャ』ということだ。

「いくぞ化け物……！」

超能力シャは拳を握りしめ、サーベルを持った殺人生物へと駆け出した。

最弱者の未知の能力（後書き）

えっと、後書きというものを初めて書きますね。

小説、茜空と超能力シャ、略して　茜空（勝手に決めました）　を読んでいただき、ありがとうございます。

作者の　黒崎　千叉　です。

国語のテストの点は平均を大きく下回る人間です。

はい、

無事に3話までとりあえず書くことができました。

ありがとうございます。

え？話が進んでない？

ごめんなさいm（__）m

結構この第3話は主人公として大切な話だったので細かく書かせていただきました。

それでなんですが。

まず思ったのが、この世界観について疑問を持たれる方がいらっしゃるかもしれません。

少し急展開かと反省しています。

と言いますかスタートでフライングしてましたね（汗

自分としては皆さんに気持ちよく読んでいただきたいので、

もしご不明な点があれば感想に一言お願いします。

回答については、感想に対して直接返信するか、皆さんに知ってもらいたいことは、質問者の方の名前を出さずに後書きの方へ回答を書きたいと思います。

それと、物語を進める上で支障のない程度でお答えさせてもらいます。

支障のあるものは

・霧間麻人の契約相手は？

などです。

また、ストーリーを進める上で明らかになるものについても回答できませんのでご了承ください。

例

・榊山高校ってどんな学校？

など…。

また、普通にまだまだ3話までしか書けてませんが、これまでのところで感想を持たれた方は一言でもいいので感想を書いて下さると励みになります。

あ、それと。

今書いてるところが終わったら本格的に学園に焦点をあわせて書いていこうと思ってます。

榊山高校の校風、新しく登場するキャラクター、そして今をはるかに上回る能力シャのバトルにご期待ください。

ん？バトルのとこハードル上げたって？

だって今のとこ、かなりしょっぱいじゃないですか（笑）

まだまだこれからですよ！

基本的に毎日更新したいと思ってますので

これからも（始まったばっかりですが…）　茜空と超能力シャ　をよろしくお願いします！

黒崎　千叉

怒れるアイツは幼なじみ

霧間の駆ける速度は、普段の『人間』のときよりも格段に速かった。それを一番感じるのは霧間麻人本人であり、それが彼の自信にも繋がっているのは事実だ。

数秒としないうちに、霧間とクリーチェストとの距離、およそ2メートル。

もう少しで彼のストレートパンチの射程範囲となる。

霧間に宿った『魔力』と、彼にもとより存在する『力』を併せ持ってすれば、運がよければ一撃で敵を戦闘不能にさせることができるだろう。

しかし、風の戦士も自分に迫る攻撃にただ呆然と立ち尽くしているだけではない。

霧間が射程距離に入った瞬間、戦士はサーベルを降り下ろした。やはり、人間が使うときとは全く違う速さ、そして纏う風の量と勢いが全く違う。

おそらく、いつもの霧間麻人なら一瞬の内に地面に転がる男と同じ状態になるだろう。

しかし、霧間も今、『人間』ではない。

彼は、姿形知らぬクリーチェストの魔力を宿した『超能力シャ』なのだ。

霧間はもとから備わっている優れた反射神経と瞬発力、そして宿りし力で走ってきた方向に対して直角に右へと横っ飛びした。

戦士の振ったサーベルは標的を捉えることができず、地面に突き刺さる。

――――チャンスだ！

霧間は着地するやいなや、明らかな隙を見せた戦士に拳を叩き込むため、地面を思いっきり蹴飛ばした。

「喰らえ化け物ぉ！！」

霧間の魔力を帯びた右ストレートが、戦士の頭に直撃した。

ガンッ！っと言う金属のような鈍い音を残して、地面に打ち付けられながらふっ飛ぶ戦士。

もしもこれを一般人に放ったとしたら、命の保証な全くないどころか、頭と胴体が繋がっているということもないだろう。

それほど彼の『力』は強大であり、危険なのだ。

――――やったか？

未だ魔力を宿しているものの、少し落ち着いた霧間は、地面に激しい傷痕を残して倒れているクリーチェストを見て思った。

被っている甲冑のこめかみ部分は、今にも崩れそうなほどの亀裂が入っている。

霧間のパンチを喰らって砕けていないことから、これは異世界の鉄であってこちらの世界の鉄ではないのだろう。

もしもこちらの世界の鉄が彼のパンチを喰らったならば、貫通しているにちがいない。
霧間はもう一撃を叩き込もうかと思ったが、戦えなさそうな相手に体力を使う必要もないと思い、攻撃するのはやめた。
「…さて、『戻る』とするか。」
霧間はそう呟き、そして胸に手を当てた。
今彼は、身に宿った魔力を抜いているのだ。
そして、ここで副作用がおこる。
———くっ…。
彼は激しい立ち眩みに襲われた。
周りの世界が真っ暗になり、闇に突き落とされた感覚にさらされる。
これは、一時的に活性化した脳の疲れにより、決まっておこる現象。
毎度のことなのだが、彼は全く慣れることができておらず、これからもそれは不可能だろう。
「…っく、はぁはぁ……。さあ…帰るか……。」
魔力を完全に抜ききった霧間は、おぼつかない足取りで家路につこうとした。
あたりはほとんど暗くなっており、街灯には明かりが灯されているだろう。
しかし、体育館裏を出ようとしたとき、彼は不吉な、そして身を震

わせる『音』を聞いてしまった。

「嘘…だろ……？」

その音、金属が擦れる音がした方向を見て、霧間麻人は苦笑した。

少しぼやける視界にも鮮明に映ったモノは、首をただれさせながら立っている化け物の姿だった。

首からはどす黒い液体がボタボタとこぼれおち、それがこの世界のモノではないことを霧間に再確認させる。

とたんに、

……ぐおおぉおぉぉおおぉ！！！

化け物が耳をつんざくような、この世のものとは思えない声で雄叫びを上げた。

それはいくら霧間麻人の心が恐怖を感じていなくても、体に鳥肌を立たせた。

そして声の主は、ゆっくりゆっくりと霧間へと足をのばした。

首がグラグラしているのは、先ほどの霧間の一撃を受けて首の骨が砕けたからだろう。

しかし、そんな負傷が魔力を引き起こすのに何の支障をもきたしていないことを、化け物のサーベルが纏う風が証明している。

いや、むしろその風は荒々しさをましているかもしれない。

「…これはまずいな……。」

霧間は冷や汗をかきながら呟いた。

それもそのはず、今の彼には、『何もできないから』だ。

逃げるにしろ、副作用の影響で走ることはできない。

歩くにしろ、化け物に追い付かれてしまうだろう。

ならば、もう一度魔力を宿せば、と思うだろうが、それは彼の体をかなり危険な状態に陥れることとなる。

疲れきった脳を無理に活性化させることは、瀕死の生物にとどめをさす、ということに等しい。

そう、『死』を意味するのだ。

実際に霧間は試したことはないが、第六感とやらが、彼に警告をするのである。

その警告はもしかすると、姿形知らぬ契約相手なのかもしれないが。

霧間がどうしようかと立ちすくむ間に、化け物はすぐ近くまで足を進めていた。

迫りくる『死』に、霧間は激しく後悔の念を抱いていた。

何故あのときにもう一度拳を打ち込まなかったのか。

何故クリーチェストが消滅するのを目で確認してから魔力を解かなかったのか。

いろんな思いが彼に押し寄せたが、化け物がとうとう目の前に来ると、それらの感情は一気に恐怖へと染まった。

霧間は、自分らしくない、とわかっていながらも、足の震えを抑えることができない。

生きたい。

霧間麻人の人間の心がそう叫んでいた。

しかし、そんな彼の思いもむなしく、化け物はサーベルを自らの頭の上に掲げた。

霧間の体は知っている。
あのサーベルは、もうすぐ自分の体を喰らうことを。
そして、二度と動くことはなくなることを。

「…ちくしょう……！」

霧間はそう吐き捨て、そして化け物を強く睨んだ。

殺した相手の顔を忘れさせないため、自分を死の淵まで追い詰めた生物を脳裏に刻みこむため。

そんな霧間麻人の意図が化け物に伝わったかはわからないが、化け物はもう一度咆哮を上げ、そして。

霧間の頭めがけてサーベルを叩きつけようと腕を振った。

怒りに満ちたようなその太刀筋は、霧間の頭をとらえようと風を切

る。

が、

――死んだ…な……。

霧間がそう思った次の瞬間、彼の目の前に、マンホールほどの太さをした一筋の閃光が駆け抜けた。

その閃光は化け物の上半身を跡形もなく消し飛ばし、そして後ろの特殊なコンクリートでできた壁に綺麗な風穴をあけた。

未だ残る閃光の余韻の中、霧間の背後から少女の声がした。

「全く、アンタは何をやってるのよ！私が来なきゃ殺されちゃってたのよ！？わかる！？」

霧間はこの少しきつい口調の主を知っていた。

「…わりぃな深月。本当に助かったよ。」

霧間は振り向き、安堵した声で深月という少女に礼を言った。

霧間麻人に深月と呼ばれる少女、本名、楠原（クスハラ）　深月（ミヅキ）は、榊山高校に通う二年生であり、学年で第2位ほどの実力をもつ。

赤茶色の腰辺りまであるツインテールと、何よりも少しあどけなさの残る凛として可愛らしい顔立ちがチャームポイント。

霧間の隣の家に住んでいて、そして何より、

霧間麻人の幼なじみだ。

そんなのんきなことを言った霧間に対して、楠原はズイズイと距離を詰めて彼に言葉を放つ。

「わりぃな？はあ！？それだけで片づけないでよ！私がどれだけ心配したと思ってるの！？いつまでたっても明かりの灯らない隣の部屋を見つめて、私がどんな心境だったか！アンタに解る！？」

そんな彼女に霧間麻人は圧されながら答えた。

「あぁ、本当に悪かった…。言い訳を帰ってから聞いてくれるとありがたい…。」

それを聞いた楠原は、フンッと鼻を鳴らし、言った。

「ったく、しょうがなく聞いてあげるわよ、しょうがなくね！…別に心配してた訳じゃないけど、何も言われなかったらイライラするの！わかる！？それに…。」

―――アンタが突然死んでいなくなっちゃったら、私、泣いちゃうじゃない。

そう言いかけたが、楠原はその言葉を飲み込んだ。

「…それに？」

霧間はやはり気になるのか、俯く楠原深月に尋ねた。

楠原は頬を赤くして、強めの口調で答える。

「細かいとこは気にしないの！男でしょ！？それよりさっさと帰るわよ！」

――ジェンダー・ヴァイアス（性差別）だ…。

霧間麻人はそう言おうとしたが、反論が飛びそうだったのでその想いを心にしまい、一足先に家路についた楠原深月の後を追った。

背後では失神し、倒れる男達と、血まみれの男の亡骸、そしてもう何かわからなくなったクリーチェストの残骸が残った。

怒れるアイツは幼なじみ（後書き）

小説の閲覧ありがとうございます、黒崎　千叉です。

梅雨は来週あたりには終わるそうですね、ありがたい限りです。

皆さんは雨を好みますか？

自分はたまに降る雨は嫌いじゃないんですが、こうもザーザー降られるとイラッとしますね。

はい。

やっと出せました。

主人公の幼なじみの　深月ちゃんです。

性格は…察してください（笑）

まあそれを解るように本編で書くのが実力なんですが…。

ツインテールって点においては

完全に自分の好み

ですね。

可愛くないですか？
いや、可愛いでしょ。

似合えば　の話ですが（笑）

彼女については本編でいろいろ明らかになるのでお楽しみに。

はい、夜も遅いのでここらへんで終わらせていただきます。

これからも、茜空と超能力シャ　をよろしくお願いします。

それでは良い日々を。

黒崎千叉

異変の前夜の星は輝いて

春の少し冷たい風が首筋をなぞる夜道で、霧間麻人は家へとゆっくり足を進めながら、楠原に説教をうけていた。

題材は、『アンタ（霧間）が死にかけたこと』について。

「まったく！なんでアンタはいつもそうやって一人で物事を解決しようとするわけ！？」

楠原の怒りの声が飛んだ。

それに対してただ黙ってうつむき、よたよたと足を進める霧間。

正直なところ、クリーチェストとの戦いで体力を使い、最終的に死の淵に立たされてかなりの精神力を使ったため、霧間は限界だった。

本当なら、彼はなぜ今日このような状況になったのかを、家に着いてからゆっくりと話すつもりだったのだ。

しかし楠原深月はそれを許さず、榊山高校を出たとたんに原因の説明を霧間に求めた。

彼はため息をつき、おぼつかない足取りをしながら、楠原に真実を伝えた。

ただストレートに、「放課後、体育館裏へ来い。とFランクの男に言われた」、と。

しかしそれを聞いた楠原は怒って先ほどの激を飛ばしたのだ。

「何よ！なんとか言いなさいよ！」

うつむくだけの霧間に対して、楠原はさらに追い立てる。

――――…と、とりあえず、少し休ませてくれ……。

そう返答したいが彼の体は言うことをきかない。

歩くだけで精一杯なのだ。

そんな霧間に対して、楠原の怒りのボルテージは上がっていく。

ツインテールがふわふわと揺れ始めたことで、霧間もそれに気づいた。

そして肩をワナワナと震わせ、唸る拳を顔の前に持ってきた楠原。

霧間から見た楠原深月の顔は、前髪がかかって目のところが影になっており、口元だけが見えている。

それだけで今の彼には十分過ぎるほどの恐怖があるのだが、怒りでその口元がピクピクと微笑んでいるため、さらなる恐怖心を霧間に与える。

彼は悟っていた、いや、体が覚えていた。

こうなった深月から次にくるのは、霧間の数倍の威力を持つキック、ということを。

それも、ミドルやローではなく、側頭部をとらえるという紛れもない『ハイキック』なのだ。

今の霧間がそれを喰らえば、最低でも気を失ってしまうだろう。

「麻人ぉぉぉぉぉ！！」

霧間の予想通り、鬼と化した楠原深月の足が降り上がった。

それは美しい半円を描きながら、ロックオンした箇所へと迫る。

———くそ…避けなきゃ、避けなきゃ、避け…。

「…へ？」

蹴りを止め、先ほどとは対象に、間抜けな声を漏らしたのは楠原だった。

それもそのはずだろう。

霧間は彼女の足が直撃する前に、疲労で立っていられなり、倒れたのだ。

突然、目の前の人間が自分が攻撃する前に地面に伸びたら当然驚くだろう。

楠原は大きな目をぱちくりさせ、そしてうつ伏せに倒れる霧間のもとへしゃがみこんだ。

そして、彼にささやく。

「意識は？」

彼女の問いに霧間は右手を上げて返答する。

「立てる？」

次の質問に霧間は、肘から先を地面と垂直に立て、そして手首から先を横に振った。

ＮＯだ、と言いたいのだろう。

「…しかたないわね。」

楠原はそんな彼の右腕を自分の肩に回し、そして霧間ごと立ち上がった。

身長差があるため、楠原は少しよろけてしまう。

霧間も少し負担が少なくなったため、支えられながらもしっかりと立っている。

余裕ができたためか、彼は楠原に言った。

「…しんどくないか？」

楠原は霧間を横目でチラッと見て、「大丈夫よ。っていうか自分の心配してなさい。」

と言った。

霧間は彼女に小さくありがとうと呟き、肩を借りながら家に向かった。

そしてそれから数分間、夜風の音しかしないというしばらくの沈黙が続いたが、それは楠原によって破られた。

「…何で呼び出されたって私に言ってくれなかったの？」

前を見たまま少し悲しそうに言った楠原の質問に対して、霧間も前を向いたまま、

「……ごめん。」

そう呟いた。

それに楠原が続ける。

「麻人はFランクの奴らから嫌われてるのよ？…ってこれは何度も言ったわね。私は麻人が死にかけたことを怒っているんじゃくて、麻人が何にも私に教えてくれないことに怒ってるの。わかるでしょ？」

霧間麻人は小さくうなずいた。

楠原が言った、彼がFランクの人間に嫌われている、というのには、れっきとした理由がある。

簡単に言えば、『妬み』なのだ。

七段階ある評価の中で、Fランクとは実に下位の中途半端な実力といえる。

契約しているクリーチェストも下級のモノばかり。
一つ上のランクに行こうとしても、『凡人以下の壁』が邪魔をして進むことができない。
そして進むことはできないが、最弱ランクのGランクに落ちることは簡単なのだ。
Fランクの人間は、基本的に自分達の下を見て笑うことで、優越感に浸っている。
逆の意味で考えれば、Fランクの人間にとってGランクに降格するというのは、最大の屈辱なのだ。
そして、Fランクにとどまる者達にも、Gランク以下の屈辱感を与える人間、それが霧間麻人なのだ。
その霧間麻人というのは、彼の実力を知らない世間一般から見れば、まさにGランクの落ちこぼれ。
しかし、記された実力と実際の力は違う。
実際の彼は、一つ上のFランクでクリーチェストから武器を借りた男達を、能力を使わずに倒せるほどの強者なのだ。
Gランクの人間に倒される、というのは社会的に見てかなりの屈辱と恥と言える。
そしてその屈辱と恥を霧間によって植えつけられるFランクの人間。
いや、実際は彼らが霧間に勝手に喧嘩をふっかけ、返り討ちにあっているだけである。

そしてそこに残るのはそれなりの評価。
早い話、自爆なのだがその評価を撤廃しようとFランクの人間は霧間を狙うのだ。
その結果、今日のようなことは頻繁に起こり、彼は毎日死と隣り合わせと言える。
「せめて一言でも言ってくれればいいのに…。もう『前』みたいに途中から参戦したりはしないからさ…。」
ふと何かを思い出すように話す楠原。
そしてなんとも複雑な表情をする。
気まずくなってしまった霧間は話題を変えた。
「…そういえば、今日一人『死んだ』よな。」
そう、クリーチェストを召還した男についてだ。
「あぁ、そうね。私が来たときにはすでに殺されてたかしら。まあ、自業自得よね。」
彼の言葉に対して、楠原は当然の如く言った。
そう、当然のように言ったのだ。
考えていただきたい。
普通、人が死んだら、せめて誰かに報告すべきではないだろうか。
そしてその後は取り調べ、事情徴収があってもおかしくない。

しかし彼らは今、平然と家に向かっている。
まるで、何事もなかったかのように。

彼らがこうしていられるのは、日本が特例で出した『法律』と、榊山高校の『校則』があるからだ。
内容は単純、日本が出したのは、『日本の従来の法による支配は貴校（榊山高校）にはおよばない』とするもの。

そして榊山高校の校則は基本的には日本の法律に基づいて作られているものの、決定的に違う点として、『命の保証はなく、命に関与するすべての事例は無視する』というものがある。

わかりやすく言えば、『殺されても何も文句は言えず、殺しても何の責任もない』ということだ。

なぜこのようなことを定めたかという理由ははっきりとしていない。

しかし、まだまだ明確でない異世界との交流も行っているこの高校で、命の保証をするということは極めて難しいだろう。

故に、クリーチェストと契約している生徒は、少し感覚がおかしいのだ。

だから今日みたいに、目の前で人が死んでいても何とも思わないのだ。

「まあ…明日は俺が死んでいてもおかしくないんだよな…。」

ハアッとため息をついて言葉を吐く霧間。

そんな彼の背中を回している手でバシッと叩いた楠原。

「…ぐふぅっ！？」

ダメージを負ってる体に一撃を受け、霧間は苦しげな声を漏らした。かまわず楠原は言葉を発する。

「なぁに言ってるのよ！あんたは十分強いでしょ？今日みたいに油断することなければ大丈夫だって！」

…油断しなければねぇ、と霧間は明るく言った楠原に対して暗いネガティブな態度で接した。

ムスッとする楠原。

「もう！自信持ちなさいよ！あんたは強いって学年トップクラスの私が言ってるのよ！？」

「トップクラス…ねぇ…。」

霧間は不思議なものを見るような目を楠原深月に向けた。

幼なじみのせいか、彼は楠原がそんな素晴らしい人間とは未だに思えないのだ。

実際に力を見せられたときはそれを実感するのだが、そのとき以外はただの素直じゃない女の子にしか見えない。

ハアッと再度ため息をつく霧間。

そんな彼に、楠原は大きな声を出した。

「あーもうっ！いつまでウジウジしてるの！？その口閉じるわよ！？」

明らかにお怒りの楠原。

ツインテールはゆらゆらと揺れ、何よりも目がいつもと違った。

そんなとき、ふと霧間に良からぬ考えが浮かんだ。

———この状態のときにからかったらどうなるんだろう…。

霧間はもうキックを受ける覚悟はできていたので、開き直っていた。

そして、どうせ受けるなら何かして新しい発見でもしてみたいという好奇心が開いた心に侵入したのだ。

そして彼は近くにある楠原の顔を見て、真顔で言った。

「どうやって閉じるんだ？キスでもしてくれるのか？」

次の瞬間、楠原の足取りが止まった。

肩を借りている霧間の足も当然止まる。

そして楠原はボーッと霧間を見ている。

その顔は街灯に照らされ、赤くなっていることが霧間にも容易にわかった。

そして数分後、楠原深月の時は動き出した。

当然、やるべきことは決まっている。

楠原は顔を真っ赤にしながら、霧間を突き飛ばした。

よろけて後ろの塀にもたれる形となった霧間。

そして、

「ばかぁぁぁぁぁ！！！」

夜だと言うのに迷惑の一つも考えず、ただ恥ずかしい気持ちを抑えたい一心で叫びながら、楠原は霧間にハイキックを喰らわせた。

「ぐふっ……。」

霧間は力なくその場に倒れた。

気絶をしたのは言うまでもないだろう。

春の夜風が彼の傍らで立つ少女の火照った頬を撫でた。

「…そんなこと……ダメなんだから…ばか。」

そんな言葉を乗せて、風は二人を残し、雲一つない夜空へと吹き上がっていった。

異変の前夜の星は輝いて（後書き）

小説の閲覧ありがとうございます、茜空と超能力シャの作者の黒崎千叉です。

明日は晴れるみたいですね。

梅雨もおわりです。

さらば、じめじめ感。

はい、本編の方なんですが。

なんだか始まりがいきなりバトルってことで暗い感じだったので、少しコメディ要素を入れました。

少しは麻人君と深月ちゃんの関係を知っていただけたでしょうか？

それと榊山高校の校則を書きました。

そして簡単にですが、そこの生徒の様子も。

明らかに現実世界とは違いますよね。

自分としては、学生の読者さんに、学生という点においては近いところはあるこど、やはり決定的に違うところがあるってことを思ってほしかったです。

それと、校則についてわからない点があれば感想の方にお願いします。

簡単に言えば、榊山高校では生きるか死ぬか、ということです。

あ、それとなんですが。

今回で序章的なものは終わりです。

ひとまずここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます。

次回からいよいよ第一章に入ります。

第一章の題は

「ある少女の過去と闇」

です。

いよいよ学園ものとして書けることに喜びを感じています。

少しでも興味を持たれた方、是非読んでください！

それではこれからも　茜空と超能力シャ　をよろしくお願いします。

皆さん良い日々を。

黒崎千叉

未来を知らぬ二人の朝（前書き）

第一章

「少女の暗き過去と未来へ光を」

未来を知らぬ二人の朝

春の暖かい朝日が、カーテンの間から霧間の寝顔を照らしていた。
時刻は午前八時前。
この時間より四十分以内に学校へ登校しなければ遅刻となる。
霧間の家がある住宅街から学校まで、片道およそ七分あれば余裕で着く距離だ。
ゆえに、このくらいの時間に起きて準備をするのがベストだといえよう。
たが、霧間はいっこうに起きる気配がしない。
朝が極端に弱い彼は目覚まし時計という起床のおともを使うべきなのだが、霧間はそれを激しく嫌う。
その理由はとくに明確ではないのだが。
ならば、霧間はいつもどのようにして起きているのか。
両親を知らぬ間に亡くし、おじさんとも別居しているため家の中で彼を起こしてくれるものは誰もいない。
そう、『家の中では』。
彼を毎朝起こしているのは、彼の部屋の窓から直線距離でおよそ2メートルのところにベッドを構える、隣人であり幼なじみの楠原深月だ。

彼女は一人暮らしをしているため、日常生活においてはそこら辺の主婦に劣らないほどしっかりしているだろう。

彼女にとって、朝時間通りに起きることなど朝飯前なのだ。

しかし、楠原は今、自分のベッドにいない。

彼女の部屋は静まり返っており、時計の秒針を刻む音しか聞こえないのだ。

かわりに、霧間の部屋には彼の寝息と違うリズムを奏でる可愛らしい寝息が流れている。

寝ている霧間の傍らに上体を突っ伏している様子で、楠原深月は眠っていたのだ。

時は戻り昨晩、霧間を蹴飛ばして気絶させてしまった彼女は、彼を家まで運んだのだ。

クリーチェストの力を少し借りたため、楠原にそれほどの負担はなかった。

自分の家から窓をまたいで霧間麻人の部屋に入った楠原は、とりあえず彼をベッドに寝かしつけた。

が、ここで問題が発生していた。

「着替え、どうしようかしら…。」

さすがに、血まみれの服を着せたまま寝かすのはどうかと楠原は思ったのだ。

「あ、麻人ー…起きてよー…。」

彼女は彼の頬っぺたをつつきながら耳元でささやいたが、霧間が意識を取り戻すことはなかった。

しばらくして、楠原は『下着以外の衣類を交換する』ことを決意し、そしてクローゼットからスウェットを取りだし、震える指先で彼を着替えさせた。

「こ、これは麻人のことを思ってなんだからね？決してやましい気持ちは…。あ、いい体……。」

終始頬を赤く染めそんなことを呟きながら。

その後、任務が完了した楠原は精神的な疲れに襲われてその場で眠ってしまったのだ。

そして眠った状態は朝まで変わることなく、今に至るというわけだ。

すーっ…すーっ…と寝息をたてる楠原深月の表情はどこか幸せそうだった。

しかし数分後、部屋に流れたメロディーによってその表情は解かれ、彼女は目をあけた。

鳴った自分の携帯のアラームを止め、すくっと立ち上がった楠原。

彼女は自分の部屋じゃないことに少し疑問を感じたが、目の前にい

る霧間麻人を見て状況を把握した。
そして昨夜のことを思いだし、少し顔が赤くなる。
「と、とりあえず麻人を起こさなきゃ…。」
楠原は少しあたふたしながらも霧間麻人の両肩に手を当て軽くゆすった。
「麻人ぉー。起きなさーい。」
彼女は、もしもこのまま起きなかったらどうしようか、と少し心配をしていたが、そんな不安は彼のいつも通りの欠伸で吹き飛んだ。
「ふあーぁ。あ、おはよ深月。」
そしていつも通りの彼に、楠原はホッと胸をなでおろした。
「おはよ、麻人。…さあ、さっさと準備しなさいよ。私朝ごはん作ってくるから。」
あいさつよりも昨晩頭を蹴ったことを謝りたかった楠原だったが、彼女はどうも霧間には素直になれない。
そんな一面は彼女の『いつも通り』なのだが。
楠原は霧間にそう言い残し、言葉通り二人分の朝ごはんをつくるべく部屋の出口に向かった。
今日は何にしようか、などと考えていると、背後から霧間の疑問に満ちた声がした。

「なあ深月、俺は確か昨日の夜気絶して、朝ここで眠っていたということはお前が運んでくれたんだろうけど、俺、何で今スウェット着てるんだ？」

一瞬、楠原の時間はフリーズした。

そして時間が解凍されると、彼女の顔は真っ赤に染まった。

楠原深月の性格上、私が着替えさせた、なんて言えるはずもなく、彼女はただその場でもじもじしはじめた。

「えっと、それはその…。」

言葉に詰まる楠原。

たった一言だけ発せばいいのだが、肝心なところで何も言えなくなるのが楠原深月のステータスといえよう。

そして右往左往する彼女の思考は、『霧間への怒り』へと変わる。

「そ、そんなこと察しなさいよバカァ！！」

そう叫んで彼女はドアを乱暴に閉めた。

部屋では、全く状況がつかめない様子の霧間麻人がポカンと突っ立っていた。

楠原は思っていた。

麻人は、どこか大切なところが抜けている、鈍感だと。

それに間違いはないが、楠原が素直じゃないことが霧間のその鈍感さがいっこうに治らない原因の一つといえよう。

その後の朝食は、楠原が霧間と目があうたびに頬を火照らせて顔を背けるという、とても気まずい時間が続いた。

未来を知らぬ二人の朝（後書き）

小説の閲覧ありがとうございます。

茜空と超能力シャ　の作者、黒崎千叉です。

今日はとても良いお天気でしたね。

梅雨も明けたそうでこれからはじめじめ感に悩まされずに済みそうです。

はい、

いよいよ第一章に入りました。

しょっぱなから暗くしちゃいけないと思ったのでまだ話題が明るいですね。

キャラが増える前にもう少し二人の関係（？）や性格を知ってほしくて書きました。

いやぁやっぱ

ツンデレっていいですね。

個人的には女子の照れた仕草がかなり好きなので…なんていうか…
…アレですね。

はい、まあ自分の話はおいといて…

第一章のタイトルは前書きにも書かせてもらいましたが、「少女の暗き過去と未来へ光を」です。

その『少女』が誰なのか予想しながら読んでいただくと幸いです。

っと言うよりすぐにわかると思いますが。

ってかわからないと話が進まないんで。

少女とは深月ちゃんのことなのか、

それとも新しく登場するキャラなのか、

それとも麻人君がガチホm―。いや、これはないですね。

というわけでこれからの展開に期待してください。

読んでくださっている皆さんの期待に答えられるような作品にしていきたいと思っています。

まだまだ駆け出しですが、茜空と超能力シャ　と　黒崎千叉　をよろしくお願いします。

それでは皆さん、良い日々を。

二人の朝のさえずり声（前書き）

少女の暗き過去と未来に光を

二人の朝のさえずり声

まだあまり人がいない朝の住宅街を、霧間麻人と楠原深月は歩いていた。

二人の通う榊山高校は制服ではなく私服のため、霧間はジーパンにプリントTシャツ、楠原は白のワンピースという格好をしている。

朝食の前のことがあったためか、二人の間にはいまだにすっきりしない空気が漂っていた。

お互いがただ前を見て、しかし時たまチラっと相手の方を見てはすぐ視線をもとに戻すという動作が、その空気を象徴している。

住宅街を抜け、少し広い道にでたところでその空気に耐えきれなくなった楠原深月が口を開いた。

「あ、あのさぁ！麻人！」

緊張して少し大きい声を出してしまったためか、霧間は少し驚いて応対する。

「は、はい。なんでしょうか…？」

そんな彼よりもきょどきょどしている楠原は、口を動かした。

そう、動かしただけ。

彼女はひとまず先ほどの空気を変えたいという一心で声を出した。

しかし話す内容など全く考えておらず、声を発する前よりも嫌な状態に陥ってしまった。
まるで、あとさき考えずに行動する子供のようだ。

「…ん？何だ？」

それを見る霧間の心は、驚きから疑問へと変化する。

誰でも、話題を振られると思ったときに、その相手が言葉を発さずに、ただもじもじしながら唇を動かしていたら疑問に思うだろう。

そして霧間は彼女の行動を、このように考えた。

――――口に出して言いたくないことなのか？

霧間は親切心のつもりでそう考えた。
朝の出来事も繋がり、きっと楠原には口に出したくないけど伝えたいことがあるのだと判断した結果だった。

ならばと思い、霧間は楠原の唇の動きをじっと見つめた。

見つめられる側になった楠原深月は、突然のことに焦り、口の動きが少しゆっくりになった。

きっと戸惑いが心を支配し、無意識に動いているのだろう。

霧間がじっと観察し、楠原は出せる声もなく戸惑うという状況がしばらく続いたが、答えを先にだしたのは霧間だった。

「えぇと、深月の言いたいことは…。」

いきなり霧間がそう言いはじめたので、状況が全く理解できていない楠原は、とりあえず聞くことしかできない。

――えっ？何よ麻人、読心術でもはじめたの？

自分でも訳のわからない考えが頭を巡っている楠原深月。

それはあながち間違っていないが、霧間が挑戦しているのは『読心術』ではなく『読唇術』だ。

楠原は霧間が自分の心をどう読んだのか、その答えに耳を傾けた。

そして霧間がその答えを告げる。

「…あ、い、し、て、る？」

「ふぇっ！？」

間抜けな声を出したのは答えを待っていた楠原深月だった。

「お前…それを言いたかったの？」

楠原の理解も確認せずに話を進める霧間。

開いた口が塞がらない楠原は、言葉をまとめることができない。

「あっ、ちょっ、その…。」

顔が赤くなり、冷静に頭が働かない楠原。

――な、何言ってんのよコイツ！私がそんなこと思ってるわけないじゃない！

本心がそう考えても、声は出てくれない。

そんな彼女に、霧間は詰め寄った。

「だ、大丈夫かよ！？顔真っ赤だぞ？…熱でもあるんじゃないのか？」

彼はそう言うと、またもや親切心で楠原の頭を両手でホールドした。

そして、彼女のおでこに自分のおでこをくっつける。

顔を距離はほんの数センチ。

少し動かせば、キスをするのではないか、というほど近い。

しばらくして頭を離した霧間は楠原に言った。

「うわー、やっぱ熱いぞ？昨日の夜に疲れたのかもな。今日はもう休んだほうが…。」

それを聞いた楠原深月は、止まっていた自分の時間を動かした。

そして、その時間を取り戻すかのよいな勢いで霧間麻人を睨む。

ツインテールがゆらゆらと重力に逆らいながら宙に漂うのを確認した霧間は、反射的に一歩後ずさる。

「えぇと、く、楠原さん？俺が何をしたって言うのですか？」

繰り出されるであろう『攻撃』に怯える霧間麻人。
深月は追い詰められた羊を狩るような目で、その『攻撃』を放った。
「アンタのせいでしょうがぁ！！」
朝の小鳥がさえずる道で、骨が軋む音がしたのは、少女の声がしてから一秒とかからなかった。
「…ばか。」
そして地面でのたうっている幼なじみにそう吐き捨て、楠原深月は学校へ向かった。

口ではそう言ったが、本心は戸惑っていた。
霧間の言った、あいしてるが心の揺れの原因である。
楠原は歩きながら、手を頭に当ててツインテールをブンブン揺らしながら呟いた。
「べ、別に期待なんか…。アイツはただの幼なじみで、その、好きとかじゃなくて、ただほっとけないっていうか…。…はっ！」
そしてふと手を頬に当てると、かなり火照っていた。
そして思い出される霧間の言葉。
「大丈夫かよ！？」

その言葉が妙に嬉しくなって彼女はさらに頬を赤くする。

「わ、私どうかしちゃって…。あーっもう！」

変に霧間に意識を持ったことを照れてしまった楠原は、その照れを隠すために元来た道を走り出した。

そこにはようやく体を起こした霧間麻人がいた。

楠原は走ってきた勢いを使って彼に向かって跳び、空中で体を地面と垂直に一回転させた。

そして彼女の綺麗な白い足は、朝の澄んだ空気の中で弧を描く。

その正面にくるのは、霧間麻人の顔だ。

「アンタなんか…大っ嫌いよぉー！！」

「だから何でぇ！？」

朝の小鳥のさえずりの中、少年の悲鳴と共に骨が折れるような音がしたのは、これもまた一秒とかからなかった。

二人の朝のさえずり声（後書き）

小説閲覧ありがとうございます。

黒崎千叉です。

今日は簡単なキャラ紹介をしようと思います。

一部ネタバレがあるのでとばして頂いてもかまいません。

・霧間麻人（きりまあさと）

Gランク
物語の主人公。
契約相手は不明。
見たこともない自分の契約しているクリーチェストの魔力を体に宿し、使うことができる。
両親を亡くしており、おじに引き取られたが今は住宅街で一人暮らし。
Fランクの人間に激しく嫌われている。
Gランクの人間にも、一部を除き嫌われている（理由は次話で公開）
楠原深月の幼なじみ。

人の気持ちを読んだりすることに関してすごく鈍感。

次回紹介するのは楠原深月ちゃんです。

それではこれからも　茜空と超能力シャ　をよろしくお願いします。

親友と呼べる存在（前書き）

第一章

少女の暗い過去と未来に光を

親友と呼べる存在

榊山高校は、『能力者が通う高校』として以外にも、だだっ広い敷地でも有名である。
やはり一学年に千人ほどの学生がいるため、当然そうなってしまうのだろう。

登校してきた楠原深月と、朝から殺人キックを二発もお見舞いされた霧間麻人は、『これより榊山高校。関係者以外の立ち入りを固く禁ずる。』と書かれた紙が貼られている校門をくぐった。

それぞれが個性をもった大きな建物が建ち並ぶ光景も、さすがに一年間過ごせばなれてくるのか、二人はちゃくちゃくと目的地である、『第二学年学習棟』へとむかう。
分かりやすく言えば、二年生の校舎だ。

人数が多いため、学年によって勉強するための建物が変わるのだ。

霧間と楠原はグランドを横目に歩き、『実践棟』と呼ばれる能力の測定や、実際に友達同士で手合わせをするための施設を左に曲がった。
すると見えてくるのは、かなり大きな三階建ての、白い壁の建物。
それが第二学年学習棟だ。

二人は玄関を通過し、階段の近くで他の生徒の邪魔にならないようなところで足を止める。

楠原が言った。

「じゃあ、私は三階だからここで。」

「おう、じゃあ。」

霧間がそう返し、楠原は階段を上がっていった。

この学校でのクラス分けは、ランクの測定によって行われている。

楠原深月、すなわちAランクの学生は、三階の一番奥の教室に入り、その階には、B、Cランクの学生の入る教室もある。

二階は、D、E、そして休憩所となっており、一階はF、そして霧間麻人が所属する最下位クラスのGがあり、そして隣には職員室がある。

なので霧間は階段にはむかわず、他の学生の間を縫うようにして一階の廊下を進んでいく。

職員室の横を通過し、彼は教室に入った。

教室内は大学の講義室のようになっており、およそ二百人ほどが入れる大きさだ。

学生の数よりも多めに入室できるようにしてある理由は、一クラスあたりに所属する学生の数が違ってくるからだ。

能力測定の結果によって振り分けられるため、全クラス等しい人数というわけにはいかない。

一番多いのはCランクとDランクであり、Cの教室には１５０人ほど、Dの教室には２００人ほどの学生がいる。

また、学生はCとDのクラスの関係を、『クリーチェスト召還の壁』と呼んでいる。

ちなみに楠原深月の所属する最高ランクのAには、彼女を含めたったの10人しかいない。

Aランクの条件は、『クリーチェストを召還し、融合できるかどうか』である。

10という数字が、その難しさを表しているといってもいいだろう。

霧間はその数字を思い出すたびに、幼なじみの楠原の存在を少し遠くに見てしまうのだった。

しかしながら、人数で考えるなら霧間麻人の所属するGランクも負けてはいない。

その人数はたった30人であり、その数字はAランクの学生に続いて少ないのだ。

ただ、Aランクの次に少ないからと言っても、楠原が霧間の存在を少し遠くに見ることは永遠にないだろう。

もともと、Gランクの実力をとることの方が謎、とも言われており、このクラスに所属する学生には何らかの事情があると言っても過言ではない。

ランクの測定は、『筆記テスト』『実技』と大きく二つにわけられている。

実を言うと、霧間麻人は点数だけ見ればDランクの実力はあるのだ。

しかし、彼にはどうしても越えられない壁がある。

それは、筆記テストの問１の最初の問題。
いや、問題と言うよりも確認といってもいいだろう。
『あなたの契約しているクリーチェストは何ですか？』というのがそれだ。

毎回出されるこの確認。誰もが書く時間しか要しないはずのこの質問。
そして何よりも、これが不正解だと問答無用でＧランクが確定するという質問なのだ。

自分自身の契約相手を知らない霧間麻人にとっては、最後の『Ａランク級の問題』よりも、いや、世界で一番難しい問題と言えよう。

なお、テストの採点については、教師たちが持っている特殊なペンを使って行われる。
自動的に、正解なら丸をうち、不正解ならばっってんを刻むという優れものだ。

このことより、教師は学生の契約相手を把握していない、とも言える。
よって彼らにも霧間麻人の契約相手はわからないのだ。

年に六回行われる測定試験で、霧間はこれまであてずっぽうでクリーチェストの種類を書いてきた。
しかし、『一万種類を越える』数から正解を当てるのは、神業とも言えるだろう。

そして霧間にそんな神様の力が宿っているわけでもないため、彼は今日もこのＧのクラスにいるのだ。

実技は、『クリーチェストから何かを借りる』という条件を満たせばFランクは確定し、『召還したクリーチェストに命令し、クリーチェストがそれに従う』というものがクリアできれば、最低でもCランクとなる。
しかしこれらは霧間麻人にとってはほとんど関係ないと言えるだろう。

霧間が教室に入ると、すでに１０人ほどの学生が来ていた。
普通なら軽い会釈の交換があってもいいのだが、彼とクラスメイトの間ではほとんどない。

理由は単純、霧間に関わるとFランクの学生から目をつけられるからだ。

霧間のような例外を除けば、何もできやしないGランクの学生は瞬殺されてしまうだろう。

ほとんどのGランクの学生がそれを恐れる故、霧間には友達がほとんどいないのだ。

霧間はいつも通り誰とも会話を交わさずに隅っこの席につく。
この場所は彼の特等席とも言え、そしてその隣、そのまた隣も必ず空いている。

霧間が距離を置かれているから、というのも理由の一つだが、最も大きな理由は他にある。

そして霧間が席について数分後、その理由が教室に入ってきた。

そいつはどかどかと教室内を歩き、霧間の特等席の隣に腰かけた。

「よう麻人！今日も愛しの彼女の深月ちゃんと仲良く登校してきたのか！？」

そしていきなり霧間に声をかけた体つきのいい、金髪でショートヘアーの男は、彼の親友であり、学年一の問題児（学力が）、岩國（イワクニ）浩也（コウヤ）だ。

そんな彼の言葉に、霧間麻人はため息をついて返す。

「俺を彼氏とするなら、朝っぱらからその愛する彼の頭に蹴りを二発も撃ち込むったぁ過激な愛情表現だな。」

それを聞いた岩國はただただ大きな声で笑う。

それを見た霧間はもう一度ため息をつき、そして親友の頭を軽く小突いく。

今日も変わらない、非日常が始まった。

親友と呼べる存在（後書き）

茜空と超能力シャ　の閲覧ありがとうございます、作者の黒崎　千叉です。

やっと入りましたね、学校。

いやあ、長かった。

飽きずによんでくださったかた、本当に感謝です。

登場しました、霧間君の親友の岩國浩也君です。

岩國の　クニ　は　国　じゃないのでそこんとこよろしくお願いします。

なんで國かって？

三國〇双みたいでかっこいいじゃないですか。

こだわりです、はい。

しょうもないこだわりです。

それはどうでもいいとしまして、

リア友から「何でツインテールなん？」って質問がきますが、

もう一度言います、個人の好みです。

はい、

なんか内容のないあとがきになりましたね。

もう少しストーリーを進めたら楠原深月さんのプロフィールを書こうと思います。

3サイズとかは想像に任せますので。

それではまた次回。

皆さんお元気でお過ごしください。

黒崎千叉

嫌われモノに近づくモノ達（前書き）

少女の暗き過去と未来に光を

嫌われモノに近づくモノ達

霧間と岩國は教室の端にある掲示板に来ていた。
数人の学生がいたのだが、二人が近づくとすぐに散っていったため、遮るものなく見ることができる。

霧間にとって、それは嬉しいのか悲しいのかわからないのだが。

「一限目、クリーチェスト・サイエンス、二限目、異世界史、そしてそのあとは自習か…。」

霧間はボソッと本日自分が受ける科目を呟いた。

一般的な高校生にとって、これらはかなりおかしな授業だろう。
しかし、ここ榊山高校の学生にとってはいたって普通であり、何の違和感もない日常なのである。

『クリーチェスト・サイエンス』とは、クリーチェストの体の構造や種類、そして人間との関係について勉強する教科。

そして『異世界史』は、字のとおり異世界の歴史を学ぶ。
ただ、一般的な高校で学習する世界史や日本史などと違うところは、つい最近おこったことも学習するということだ。

異世界は広い。
そんな世界でおこった出来事を隅から隅まで把握する現実世界と異世界の力は、まさに科学と超能力の結晶と呼べるだろう。

自習は、生徒各々が自らのランクをあげるために自分自身でプラン

を組み、行動することだ。
勉強する者もいれば、『実戦棟』に行って生徒同士で戦ったりする者達もいる。
もちろん、学校に一つだけ存在する『歪み』から異世界に行ってもよい。

「いやぁ、今日もいつもと変わらねぇな！」
大きな欠伸をしながら声を出したのは岩國だ。
「そうか？少なくとも先週の金曜日は異世界史が二限連続であったはずだが…。」
霧間は自分の記憶をたどりながら質問をした。
「いや、俺はいっつも寝てるからさ、授業がなんだろうと関係ねぇんだわ。」
「…思い出した俺がバカだったよ。」
へらへらと笑って言う岩國浩也に霧間麻人は呆れた感じで返答した。
そしてこれが、岩國がGランクでいる理由だ。
岩國浩也は、彼の契約相手『クレイズ・ゴーレム』から、その能力を『転送』してもらうことができる。
ゆえに、最低でもFランクになれるのだ。

しかし、問題は筆記テスト。

勉強を強く嫌う岩國は、テストが始まった瞬間、まっさきに寝る。

彼は終了時間までその状態のため、霧間同様、最初の問題の解答欄が空白になっているのだ。

そしてそれはGランク確定を意味する。

せめてそこさえ書けば上のランクにいける、と霧間は言うが、お前と一緒の方がおもしろいから、と岩國に書く気はさらさらない。

そんな彼を、霧間は根っからのバカというが本心は嬉しく思っている。

楠原のように素直じゃないわけではないが。

二人は授業開始のチャイムを耳にしたため、席についた。

同時に、前のドアを開けて教室へと入り、教卓に構えた白衣の男教師。

クラス全員が教科書など、授業を受ける準備を始める。

クリーチェスト・サイエンスの緑色の分厚い本は一年生からの持ち上がりであるため、折れたりしてボロボロになっている。

霧間はそんな教科書とノート、筆箱を机の上に出し、授業を聞く姿勢に入った。

一方、隣では霧間とは真逆に机に伏して寝ている岩國がいた。

――――こいつは卒業できんのか？

霧間はそんなことを思いながら前を向いた。

先生が出席を確認し終わり、教科書を開ける。

クラスが静まり、先生が話し出そうとしたまさにその時、バンッ！っと後ろのドアが大きな衝撃音を出して激しく開いた。

同時に、

「遅れました！ごめんなさい！」

背の低い水色のショートヘアーをした少女がそう叫びながら教室へと飛び込んできた。

「また遅刻か！何度したら気がすむんだ藍川（アイカワ）　澪美（レミ）！さっさと席に座れ！」

「ごめんなさーい！」

教師に怒号をとばされた少女、藍川澪美は精一杯の返事をし、席へと走り出した。

向かう先は、熟睡中の岩國浩也の隣。

彼女もまた、岩國のように霧間が慕う親友の1人なのだ。

藍川澪美は榊山高校ではかなり有名な生徒だ。
名が上がる要因の一つとしては、普通に可愛いから、ということが言えるだろう。
しかし、理由はそれだけではない。
「くぅっ…。」
走っていたはずの藍川がこのように痛そうな声を漏らしたのは、机の足で小指をぶつけてしまったからだ。
さらによろめき、開いていた鞄からはバサバサと乾いた紙の音がして教科書類がばらまかれる。
「ご、ごめんなさい！」
痛みによる涙目をしながら、彼女は終始おどおどしていた。
名が上がる最大の理由は、このように学校一のドジなのだ。
それが愛くるしさを高めていると言えば嘘ではないが、少し度が過ぎている。
そんな彼女がGランクでいる理由は、霧間も岩國も知らない。
いや、学校で知っている者は誰もいない。
しかし一部では、かなり強力な魔力をもったクリーチェストと契約していると噂されている。

藍川は慌ただしく熟睡中の岩國の隣に座り、授業の用意をする。
霧間はそんな彼女を見て、クスッと微笑み、そして黒板に目を移した。
巨大な黒板の左上には、『融合時の覚醒と暴走』と書かれている。
「いいですかみなさん。今解説したように、クリーチェストと融合しているときに『なんらかの作用によってクリーチェストと完全に一体化すること』を『覚醒』と言います。覚醒中は今までとは比べ物にならない力を得ることができます。」
今、教師が話したことが覚醒についてだ。
なんらかの作用とは、個人によって違う。
死の直前になったとき、大切な人を失ったときなどと様々だ。
そして、次に教師はもう一つの話題について話を始める。
「覚醒と紙一重といえるのが『暴走』です。これは、『なんらかの作用によって、クリーチェストの能力に理性をとばされた』ときに発生します。暴走中は意識がなくなり、ただ暴れまわるだけの獣のようになってしまいます。みなさんも、もし融合できるほど成長したときにはこれらのことを忘れないでください。あ、ちなみにAランクに満たない者が融合をすると、確実に暴走するか即死するかのどちらかとなるのでやめておいてくださいね。」

――――この中にAランクになるやつがいるのかねぇ。

霧間は教師の言葉を聞いて思った。

現実的に考えて、GランクからAランクに上がるのは不可能に近い。今日のAランクの人数の少なさが、上位ランクの人間でもAに上がるのが難しいことを示していた。

不意に、霧間はチラッと隣を見る。

楠原とは違い、いびきをかいて眠る岩國がいた。

――――こいつはまあ無理だな。

そんな彼を見て、霧間は本心からそう思い、苦笑いを浮かべた。

そんなとき、そのまた隣に座る藍川澪美に目が移る。

彼女は前髪を指先でくるくる巻いて弄りながらボーッとしていた。藍川澪美の行動を見ていると癒される、というのは全校生徒に共通しているだろう。

もちろん霧間も例外ではない。

今も、彼はまるで小動物を観察するような目付きで藍川を見ている。

「…深月こんなキャラとか、ありえねぇだろうな。」

霧間は思い付いたことをボソッと口にした。

その直後、癒されている筈なのに背筋が何者からの殺気によって凍

りついたのはいうまでもない。

５０分におよぶの授業が終わり、クラス全員がガサガサと動いて数人でグループを作り雑談をはじめる。

霧間麻人の前には、肩にかかるくらいの水色の髪をした藍川澪美がいた。

「おはよ！麻人くん！」

藍川は微笑みながら霧間にあいさつをする。

「おはよう、藍川さん。」

「もう、澪美でいいって言ってるでしょ？」

彼の発言が気に入らなかったのか、藍川は頬っぺたを膨らませている。

「ごめんごめん、なんか照れくさくって…。」

こんな会話を、二人は一年生から何度しただろうか。

周りは慣れた目でそんな二人を見る。

当然、男子からは嫉妬の目があるが霧間は一切気にしない。

「もう、いつか呼んでもらうからね？って、次は異世界史じゃん！準備しないと…。」

そう言って自分の席に戻る途中、飛んでいた虫に驚いて壁に頭をぶつけた藍川を霧間は苦笑いで見ていた。

５０分後、異世界史が終わり、次の授業は自習という名の放課後になる。

時刻はお昼時。
教室では弁当を広げたり雑談したりする学生でかなりざわついていた。

霧間が寝ている岩國を起こそうとしたその時、バンッと音を立てて教室のドアが開き、場の空気を一瞬にして静める人物が教室に入ってきた。

「麻人！勝負しましょ！」

Aランク、校内ランキングトップ、そしてトップクラスの美少女、赤茶色のツインテールをなびかせる霧間の幼なじみ、楠原深月だ。

「お前、最下位ランクをいじめて楽しいのか？」

「おっす！深月ちゃん！」

「こんにちは～。」

霧間、岩國、藍川は口々に発言した。

楠原は霧間以外の二人に軽く微笑むと残った彼にむかって言った。

「アンタの実力は最下位ランクじゃないでしょ？ほら早く！」

「えーっ。」

そう言いながらもフラフラと楠原に近づく霧間麻人。
心底嫌なわけではないようだ。

「やる気満々じゃん！ほら、行くわよ！」

そう言うと深月は霧間の手をひいて走り出した。

「おま、急に引っ張るな！腕がとれる！」

彼も遅れないよう足をこいだ。

「澪美ちゃん、俺らも見に行こっか。」

「そうですね、行きましょう！」

残された岩國と藍川も同じ方向へ進みだした。

嫌われモノに近づくモノ達（後書き）

茜空の閲覧ありがとうございます、作者の黒崎千叉です。

今回登場しました藍川さん。

澪美の読み方は　れいみ　ではなく　れみ　なのでよろしくお願いします。

個人的には藍川さんより深月ちゃんの方が好きですね。

きっと僕のリア友もそうでしょう。

では夜も深いのでこれにて。

みなさん良い日々を。

ps.　次回は楠原深月のプロフィールを書きます。

天使の力を持つ少女の疑問（前書き）

少女の暗き過去と未来に光を

天使の力を持つ少女の疑問

それぞれの歩く速度は違っているものの、四人は朝に霧間と楠原が横を通った『実戦棟』と呼ばれる建物にむかっていた。
実戦棟は三階建てとなっており、かなり大きい。

今回彼らが使うのは、『コロシアム』という二階にあたる場所だ。
コロシアムには数台の装置があり、それを使うことで異世界にとんで戦闘をすることができる。
そしてその中での戦闘では、戦闘不能となるダメージを受けた時点で強制的に現実世界へと排出される仕組みになっている。
なお、そのときに受けた傷、及び疲労などについては装置によってリセットされる。
故に死んだりすることはなく、疲れも溜まらないので霧間にとってかなりありがたい場所だ。
コロシアムは学生の能力の発展を促進させる、絶好の施設といえるだろう。

霧間と楠原が実戦棟に到着したのは、教室を出てから五分とかからなかった。
建物に入ると一階で楠原はなれた手つきで受付を済ませる。
そしてエレベーターを使って二人は二階に上がった。

コロシアムと書かれたドアの前で霧間が口を開く。
「はぁ…なんで俺がAランクの女王と戦わなくちゃいけないんだよ…。」
「そう言ってるわりには案外やる気まんまんなんじゃない？」
楠原は霧間の足下を見て言った。
そこにはまるで体操をするように足首が回っていた。
「…無意識だ。」
「無意識にそこまで戦闘体制なら上等よ。」
ため息をつく霧間を後目に、楠原はドアを開けた。
ドアの先、コロシアムには透明の膜でつくられた小型のドームのようなものが数十個並んでいる。
これが戦闘の手助けをする装置だ。
この中に入ることで異世界にとぶことができる。
授業が終わってすぐというだけありまだ誰も使用していなかったため、二人は鞄をロッカーに突っ込んでその中に入った。
中には白い水晶玉がふわふわと浮いている。
厳密には、これに触れることで異世界に移ることができるのだ。
「久々だからわくわくするね、麻人！」
「…お手柔らかに頼むよ。」

いつもと違って上機嫌だな…、などと霧間が思った次の瞬間、二人は乗っているジェットコースターが勢いよくレールを駆けるときのような感覚にさらされ、体が浮いているように感じた。

そして数秒後、二人は荒地にいた。

しかし、ただの荒地ではない。
岩の間から顔を覗かせる植物は、長いつるを空中に漂わせ、虫のようなものを補食している。

そして、その捕まっている虫のようなものも現実世界ではまずお目にかかれない、体長５０センチはあろうかというほどのトンボだ。

ただ、現実世界のトンボはこんなに鋭い牙をもっていることはないだろう。

霧間と楠原はそんな光景を見慣れたように眺めていた。

「じゃあ…遠慮なくいくわよ！？」

視線を霧間に絞った楠原深月がそう叫んだ。

「今日は負けねぇからな？」

普段とは別人のように答える霧間。
彼の目は闘争心に溢れていた。

「…良い答え、嬉しいわ！」

楠原はそう言って歯を見せて笑うと、手を天に掲げた。
刹那、眩い閃光が彼女の手のひらに訪れる。
霧間は見慣れたためか、瞬きひとつしない。
そして光が消えたあと、彼女の手には金色のステッキが握られていた。
先端には赤く輝く丸い玉がついており、そこから放たれる魔力が周りの景色をぼやけさせている。
「『闇雲裁きの杖』か…。いきなり力みすぎてるんじゃないのか？」
霧間は軽く苦笑いをしながら楠原に言った。
『闇雲裁きの杖』は、楠原深月が契約しているクリーチェスト『罪裁きの天使』の所持品だ。
そして罪裁きの天使は、異世界の天界と呼ばれる場所で、呼んで字のごとく、異世界で罪を犯したモノを裁いている天使だ。
罪裁きの天使にもたくさんの種類がいるが、楠原深月が契約している相手は現実世界で言うところの死刑を担当している天使。
その魔力は天界では、『神』と呼ばれるモノの次に大きいとされ、今楠原が手にしているステッキもかなり魔力の強い物なのだ。
「こんくらいしないと…つまんないでしょ！？」

楠原はそう言い放つと同時に、闇雲裁きの杖を霧間に向けた。
そこには複雑な紋章が白で描かれてゆく。
そして紋章が完成したとき、それは白く輝きを放った。
執行の準備完了、と告げるように。
それを目で確認した楠原は叫んだ。
「くらいなさい！『裁きの光槍』！」
次の瞬間、紋章が金色に輝いた。
同時に激しい音を轟かせながら、昨日の風の戦士を消滅させた光のレーザーが一直線に荒野を駆け抜ける。
周りの塵などを消し飛ばしながら、それは一閃の直線を描いく。
そしてそれが直撃した岩山は、少しばかりの瓦礫を残して跡形もなく消し飛ばされた。
その数秒後、残響を残して閃光は姿を消す。
未だに震える空気が、彼女の能力の強さを物語っている。
しかし、その光の軌跡に霧間麻人の姿はなかった。
「いきなりそれを放つとは…。さすが最高ランク、やってくれるね。」
楠原は背後から聞こえた声の主と向かい合う。

その主、霧間麻人は体を薄い白で光らせていた。
「成長したじゃない。最初の頃はあれ一発でバタンキューだったのに。」
「いつまでも一筋縄じゃいかないさ。…さあ、反撃といこうか！」
楠原に言い返した霧間は地面を蹴り、猛スピードで彼女に接近する。
「おらぁ！」
拳を握りしめ、霧間は楠原に殴りかかった。
普通なら、女の子に手を出すな、なんていう言葉が飛ぶだろうが、彼らの過ごす日常ではそのような言葉は存在しなくなっている。
なぜなら、そんなことを言っていては殺されるからだ。

霧間が殴りかかってきているのに、楠原にまったく焦ったりする様子は見られない。
そして彼女はステッキを光らせて呟いた。
「『十字架の拘束』」
刹那、霧間を取り囲むように表れた光を放つ十字架。
「危なっ…！」
それを見た彼はとっさに空中に跳んだ。

勿論、並の跳躍ではない。
地上から8メートルほどの高さまで、霧間は到達した。
楠原が放った『十字架の拘束』は、闇雲裁きの杖の能力の一つで、取り囲んだ対象の自由を奪うことができる。
ただ、取り囲んでから少し時間がかかるので、今回のように霧間に容易く回避されてしまう。

しかし、これは楠原深月の策だった。

「空中で避けることができるかしら!?『裁きの光槍』!」

霧間に向けられたステッキの先端に描かれた紋章が輝き、そして彼に向けて容赦なく突き刺さる光のレーザー。
それは霧間が前につきだした両手に激しくぶつかる。

閃光と彼の手から発せられている魔力が激しい音をたて、互いに反発しあう。
そこからは美しい光の破片が散っているのだが、二人にそんなものを見ている暇はない。

「らあぁぁぁぁぁぁ!!」

霧間が手に魔力を集中させた。

押している。
わずかだが、彼の掌は閃光を押し返している。

そして霧間の魔力が最大になったとき、彼は閃光の軌道をそらすことに成功した。

霧間を苦しめた閃光は、遥か彼方へと姿を消す。

「どうだ！今度こそ俺の反撃…」

「ゴメンね？やっぱり負けるのは悔しいの。『裁きの鉄鎚』！」

元気な霧間の言葉を遮って楠原がそう唱えると、先ほどの二つとはまた違う紋章が輝き、霧間の頭上には光を放つ巨大な鎚が出現した。

「おいおい、これはさすがにキツいぜ…。」

刹那、またもや彼の言葉を遮って、鎚が重力に従って垂直に落下した。

気がつけば、霧間は現実世界にいた。

彼の目の前にはドームがあり、数人の学生がちらちらと彼を見ている。

「ははっ、やっぱ深月ちゃんには勝てないか！」

霧間は背後からした聞きなれた声に反応し振り返った。

そこにはロッカーの隣にあるベンチに堂々と座り、ツンツンの金髪のもと笑う岩國浩也、そしてその隣で軽い会釈をし、ちょこんとすわる水色の髪の藍川澪美の姿があった。

「ま、まぁ学年トップクラスの実力ですから…。」

仕方ないと言いたげに藍川は呟いた。

それでも霧間は悔しいのか、不満そうな顔をしている。

「そのトップクラスの攻撃を跳ね返したんだからすごいんじゃない？」

眉間にシワを寄せる霧間が振り向くと、そこには赤茶色のツインテール、楠原深月がいた。

「あんなの、『融合』してないんだからトップクラスの実力とは言えねぇだろ。」

彼はそう呟いた。

たしかに、楠原が使ったのは『転送』。契約相手が強いためそれだけでもかなり強力だが、それはDランクの力でしかない。

「まぁそれもそうね…。試してみる？」

楠原がニヤッと笑って言う。

「俺はさっき戦ったばっかだからパスだ。浩也、頼んだ。」

「俺かよ！勝てるわけねぇだろ！」

岩國浩也はいきなり話を振られて驚いた。

彼の言った通り、楠原に勝つのは不可能だろう。

本気の彼女に勝つのは、学年一位、二位を争うモノたちくらいではないだろうか。

「じゃあ…」

霧間と岩國の視線は水色のショートヘアーに移る。

「ふぇっ！？嫌ですよ！怖いです！！」

首や手、あらゆるところをブンブン振って拒否する藍川。

霧間と岩國からすれば、その姿は可愛らしい。
そう、そうとしか思わないだろう。
涙目に上目遣い。自然と笑みをこぼす男二人。

しかし、このとき楠原深月は一人、強烈な殺気を感じていた。

それは、藍川澪美の涙の奥、そこに潜む何かから。

そして、楠原はその何かを彼女自信の目で確認した。

———青い…球体？

彼女が見たのは文字通り、青い玉だった。
それはじっとして行儀よくしているわけではなく、ユラユラと動いている。

———たしかどこかで…。

ふと疑問を感じた楠原は、藍川に話しかける。

「ねぇ澪美ちゃん…。」

「な、なんですか？」

「あなたの契約しているクリーチェストって、何なの？」

それを聞いたとき、一瞬だけ藍川の顔は凍りついた。
それと同時に姿を消した青い玉。

藍川はすぐにいつものような笑みを浮かべながら楠原に返答する。

「た、たいした相手じゃないですよ？だ、だって私、Gランクですし！」

「じゃあ…何であなたはGランクなの？」

藍川に対し、もう一度質問した楠原。

しかし少女二人の間に霧間が入り、会話を中断させた。

「どうしたんだよ深月…。いきなりそんなこと言って。らしくないぞ？」

俯く彼女。
霧間からは背後の藍川の表情が掴めないが、きっと深月と同じようになってるだろな、と彼は思う。

「いや、別に…気になっただけよ。」

そう言うと楠原はコロシアムから出ていった。
おそらく食堂に向かったのだろう。

「さっ！こんな暗い空気はゴメンだ！誰にだって疑問の一つや二つ、言いたくないことも同じくらいあるさ、気にすんな！さあ飯食いに行こうぜ！」

岩國は藍川を元気づけようといつもより明るい口調でそう言い、コロシアムを出ていった。

霧間もそんな岩國のあとを追うように出ようとする。

「あ、麻人くん！」

が、藍川に呼び止められて顔だけ後ろをむく。

「さっきは…その、ありがとう。」

モジモジしながらそう言った藍川。

「いいっていいって！ほら！あんまり二人を待たせちゃ悪いから行こうぜ！」

そう言って霧間は藍川の手をとって、コロシアムをあとにした。

天使の力を持つ少女の疑問（後書き）

茜空の閲覧ありがとうございます、黒崎千叉です。

少し事情がありまして更新がしばらくストップしていました。

これからもこのようなことがあるかと思いますがご了承ください。

はい、

今日は深月ちゃんのプロフィールでしたね。

３サイズはご想像にお任せします。

楠原　深月

学年トップクラスのＡランク。

伸長１６５センチ程度。

凜とした感じだが、どこかあどけなさの残る可愛らしい顔立ち。

髪は赤茶色で横をツインテールにしている。
怒ったとき、語尾に「わかる！？」をつける。
キレた霧間麻人に対してのみ、こめかみ直撃のハイキックを繰り出す。
その際はツインテールがユラユラと揺れる（魔力？）。

契約相手は罪裁きの天使。
主に、闇雲裁きの杖を転送してもらう。

戦闘中以外は素直じゃなく、すぐに顔を赤らめたり思ってもないことを言う。

霧間麻人の幼なじみ。

それではここらへんで。

これからも　茜空と超能力シャ　をよろしくお願いします。

黒崎千叉

幸せな時間、笑み、いつまで…（前書き）

少女の暗き過去と未来に光を

幸せな時間、笑み、いつまで…

四人は実戦棟のすぐ近くにある食堂に来ていた。
授業の後、一汗をかいた霧間と楠原のお腹はまさに何か食べ物を求めるかのように泣いている。

しかし、

「…当分食えそうにねぇな。」

霧間が呟いたように、他の学生が多すぎて順番が回ってきそうにないのだ。

普段なら待つことができるだろうが、今の二人にとってレジにいる人すら見ることのできないほどの人だかりは、さすがに苦痛だった。

「お腹空いた…。」

「あぁ、俺もだ…。」

現実逃避するかのように俯く霧間と楠原。
目を背けたところで空腹からは逃げられはしないが、こうでもしないとやっていけないのだろう。

そんな二人を見かねた岩國浩也が言った。

「そんなに腹減ってるなら先に座ってろよ。どうせカレーとかでいいんだろ？」

そんな岩國をまるで神様でも見るかのように眺める霧間麻人。

「よろしくお願いします。」

彼はぺこりと礼儀正しく頭を下げ、空いている席へとむかった。

楠原はそれによたよたとついていく。

列には彼ら二人ほどお腹を空かせていない岩國、そして藍川が残った。

それほど大きな事態ではなかったが、実戦棟で楠原の質問を受けてから藍川の様子はおかしかった。

どこか元気がなく、そして何かに怯えているようにもとれるだろう。

当然それに気づかないほど、岩國も鈍感ではない。

「なあ藍川ぁ。」

「は、はい！何ですか！？」

「どうしたんだ？暗い顔して…。」

「え…と、あの…その……。」

明らかに動揺する藍川。

しかし対称に、岩國は笑って言った。

「深月ちゃんのことは気にするなって！彼女も悪気があって言ってるんじゃないし！」

「え…あ、あ…。」

考えていることを当てられ、心を読まれるのではないかなどと思いながら、藍川は再び動揺を見せる。

そんな彼女の頭を、岩國は軽く撫でた。

彼の大きな手のひらが、小さな藍川澪美の頭に被さる。

しばらくして安心したのか、藍川は落ち着きを取り戻した。

そして自分の頭に手を置く金髪の少年を見つめる。

その少年、岩國浩也はもう一度微笑み、そして、

「……なっ？」

そう彼女に言った。

日本語の文法から考えて、主語もなにも確立されていない言葉だったが、藍川は笑顔を取り戻した。

「…そうですよね！深く考えても仕方ありません！さっ！早くカレー買いますよ！」

「あぁ、そうだな！」

いつもの藍川澪美に戻ったことに、岩國は安心の笑みを浮かべた。

…笑顔が戻らなかったらどうしようか、などと考えていたからなおさらだろう。

「さあ！行きましょう！」

そして岩國の手をひいて駆け出す藍川。

が、

「キャッ！？」

人の多い行列で足を回した彼女は、あっけなく目の前の人にぶつかり、そして転けそうになったところを岩國に助けられた。

「まったく…これだからドジッ娘は…。」

「うぅ…。」

藍川は彼を目に涙を溜めながら上目遣いで見る。

いつも通りになったのはいいがこれがあるんだな、と思った岩國だった。

しかし心のどこかでは、やっぱりこんな彼女を見ていたいと思う彼も確かにいた。

学生のにぎわうテーブルで、楠原深月はいまだに難しい顔をしていた。

藍川の答えを聞けなかったことが、そして彼女自信が確かに見た瞳

の奥の光が気になっていることがその原因だ。

「深月…。」

「……」

霧間の言葉にも無言の楠原。

言葉を発しないどころか、視線すら合わせようとしない。

「おーい！」

「……」

楠原はどうしても返事をしない。

空腹で元気がないのは百も承知なのだが、今彼女がなんのリアクションをしない理由は他にある。

霧間は少し意地になっていた。

今なら、あのハイキックを喰らっても構わないから、どうにかしていつもの彼女に戻ってほしい、という思いすら生まれてきているだろう。

――そうだ。

その思いが、霧間にアイデアを与えた。

そして霧間は、それを実行すべく立ち上がる。

どうせ無視されるのだから、と、彼は静かに、隠密に行動することはしなかった。

そして、楠原の後ろに立つ。
刹那、霧間は彼女の髪をとめているゴムを引っ張り、ツインテールを崩壊させた。

「なっ……！！」

さすがにこれには驚き、声をあげる楠原。
しかし霧間の攻撃は止まらない。

「深月は顔可愛いんだからさぁ。髪形変えてみたら？」

そう言って楠原の髪をいじくる。
彼女はわたふたしながらも、これと言った抵抗もしない。

そして数分後、

「よし！できた！」

霧間が勝利の声をあげる。
そして手鏡を楠原に手渡した。

「ちょ、ちょっとアンタ何してるのよ！」

「いいから見てみろって！」

もう、と言いながらも、楠原は恐る恐る鏡を覗きこむ。

そこにはいつものツインテールとは違い、横髪だけを少し上のところでくくったツインテールの楠原深月がいた。

「ちょ…これ……。」

「どうだ？可愛いだろ！？」

「バカ！」

顔を真っ赤にさせ、楠原はトイレの方に駆けていった。

霧間はほっと一息つき、椅子に腰かける。

そして、天井を見上げた。

楠原には気にするなと言ったが、彼自信も少し気になっていた。

藍川はいったい…と、考えていると、霧間は永久に出られない迷路に入っていく感覚に襲われる。

そして止まらない負の連鎖を、彼は肌で、心で感じていた。

そんなとき、

「待たせたな、麻人。」

「お待たせぇ！」

カレーをそれぞれ二つずつ持ち、岩國、藍川が彼のもとにきた。

そして二人は向かいの席に座る。

「あれ？深月ちゃんは？」

「トイレ行ったぞ。走ってな。」

「おまえ、何かしたのか？」

「うーん、ちょっとね。」

霧間の言葉に二人が首を傾げると、楠原が戻ってきた。

髪形は霧間にいじられた状態から変化していない。
変わっている点と言えば、先ほどはゴムでくくってあったところに
天使の羽の形をした髪止めがされているところだ。

「なんだよ、気に入ってんじゃねぇか。」

「うるさい！戻すのがめんどくさかっただけよ！」

「じゃあ何でそんな髪止めしてるんだ？」

うっ、と言葉が詰まる楠原。
そして霧間から目線をそらせた結果、藍川と目があってしまった。

思わず息を飲んだ岩國。

しかし藍川はいつもの笑顔で、

「可愛いよ？深月ちゃん！」

そう言った。

楠原は、かーっと顔が赤くなる。

「ほら！その髪形、藍川さんにも認められたぞ！これからそれで登校しろ！」

霧間はニカッと笑って言う。

そして藍川から目をそらせた楠原は、そんな彼と目があう。

「だ……そ、その……。」

ちゃんと言葉を発することができていない楠原。

そんな彼女に霧間がとどめを刺す。

「深月、可愛いぞ？」

それを言われた楠原は、

「みんなばかぁぁ！！」

そう言って再びトイレに駆けていった。

「深月ちゃん、お腹空いてるんじゃなかったのか？」

岩國が霧間に問う。

「ああなったアイツを止められるのはねぇよ。さあ食おうぜ。」

霧間はそう言ってカレーを食べ始める。

続いて二人も食べ始めた。

幸せな笑顔が戻った。
きっとこれからもずっと続くだろう、と、霧間と岩國はこのとき思っていた。

これから起こる悲しみの未来もわかるはずもなく。

幸せな時間、笑み、いつまで…（後書き）

小説の閲覧ありがとうございます、黒崎千叉です。

更新できなくてすみません。

少し多忙な日々が続いておりまして…。

はい、

今現在、横浜におります。

オープンキャンパスの都合で来てるのです。

いやぁ…

暑いですね。

昼間は東京行ってきました。

御茶ノ水と秋葉原を行ったりきたりしてました。

いやぁ…東京、いいですね。

それでは

これからも　茜空と超能力シャ　をよろしくお願いします。

あっ、最後になりましたが。

お気に入り登録をしてくださっている方々、本当にありがとうございます。

みなさんの評価が原動力となるので、もしよろしければどのような形でもよいので、評価の方お願いします。

それではみなさん、よい日々を。

指をかけられた引き金（前書き）

少女の暗き過去と未来に光を

指をかけられた引き金

霧間、岩國、藍川の三人はできたてのカレーをほおばっていた。
楠原がトイレに駆けていったあとしばらく待ったのだが、かれこれ十五分以上たってももどってこなかったため、霧間たちは少しフライングさせてもらったのだ。
いや、彼らがフライングしたのではなく、楠原深月が遅れをとっている、と言ってもおかしくはない。
むしろ、霧間たちは十五分以上も待たされた被害者、の方が正しいかもしれない。

「なあ、深月ちゃん何してんだ？」

カレーをスプーンで口に運びながら、岩國が言った。

「朝から元気だったし、腹痛じゃねぇだろ。きっと俺に変えられた髪型でも直してるんじゃねぇのか？」

笑ながら返した霧間。

「っていうか、深月ちゃんって麻人君に何か言われると、すぐに顔が赤くなるよね？何でなんだろう…。」

藍川が会話に新たに質問を投げ入れた。

「澪美ちゃん、きっとこれだよこれ。」

岩國はその疑問に対して、隣にいる藍川には見えて机のむかいにいる霧間には見えないようにハートマークをつくった。

「あ、あぁ…なるほど。」

ポッ、と顔を赤める藍川。

「な、なんだよ！俺の方見てニヤニヤして！これって何なんだよ！」

霧間は全く状況が読めていない。

しかも楠原の話をしていたのに、自分の顔にカレーがついているんじゃないか？といった感じで、しきりに顔を手で探索している。

「…浩也君、もしかして麻人君って……。」

「あぁ、こういうことに関しては驚くほど鈍感だな。」

「…これは深月ちゃん、苦労しますね。」

ハァ、とため息を漏らす二人。

霧間は不安になったため、とにかく話題を変えようと発言をした。

「そ、そう言えば深月のこと忘れてないか！？」

今まさに深月ちゃんのことを言ってたんだよ、お前込みでな、と言いたげな岩國。

藍川が返した。

「わ、私見てきましょうか？」

岩國がそれに対して、良い考えだ、と頷く。
霧間は、とにかく自分に何かあるんじゃないか？という不安から脱け出せたことにホッとしていた。
こんな全く違う様子の二人だが、共通して思っていることがあった。
藍川がいつものように完全に戻ったことだ。
コロシアムを出たときはどうなるかと思っていた二人だが、ときが進むにつれてそんな不安は徐々に消えていった。
そして今この瞬間、心のひっかかりは完全に消滅したのだ。
「じゃあ藍川さん、よろしく！」
霧間はニコッと微笑んで言った。
「もう、澪美でいいって言ってるでしょ？」
軽く頬っぺたを膨らませた藍川。
岩國は、それをまるでハムスターのように見て笑っていた。
藍川は女子トイレにむかうべく席を立った。
いまだに食堂は学生たちでにぎわっている。
霧間は岩國と二人で何を話そうか、などを考えていた。
いや、むしろ話す内容は決めていたので、どう話そうかを考えていた。

内容はもちろん、先ほど岩國と藍川が話していたことについて。
霧間はやはりそれがどこか気になって仕方がなかったのだ。
藍川が椅子をひいて、トイレに足を進めた。
そして少し距離が生まれたとき、霧間は思いきって岩國浩也に切り出した。
「あ、あのさ、浩也、さっきは藍川さんと何を…」
しかし、その言葉を遮り、霧間の背後から声がした。
「おい、落ちこぼれのGランク二人組。」
霧間は声の主のほうを見て、岩國は目線を上げた。
そこにいたのは、背が少しだけ小さい、メガネをかけたいかにも『優等生』といった雰囲気の少年と、ガムをクチャクチャと噛んでいる、岩國ほどではないが金髪の男がいた。
「なんの用だよ。」
金髪の男にむけて霧間は言った。
霧間はこの二人を知っている。
もちろん、『友達』なんて関係じゃない。
メガネをかけた少年は、Fランクの『氷使い』の佐川、金髪の男はFランクの『炎使い』、三宅という。

この二人、主に三宅は、以前霧間にケンカをふっかけたことがあった。
もちろん、ケンカと言っても命がけのものなのだが。
そのときは、たまたま通りかかった楠原がいたため、結局騒動はおこらなかった。

「他でもねぇ、俺と勝負しろや霧間麻人。」

三宅が用件を話した。

もちろん、霧間はそれに噛みつく。

「上等だよ。場所はどこだ？体育館裏か？学校の外れか？コロシアムか？」

「ずいぶんと強きじゃないか。よし、場所はコロシアムだ。…まあ、俺が女に守られてる奴に負けるとは思えないがな。」

霧間に皮肉を言う三宅。
『女に守られてる』というのは、前回ケンカが始まる前に楠原が来たことを指す。
挑発とわかっていても、カーッとなってしまうような言葉だが、霧間は鼻で笑って言った。

「その『女が来た瞬間に逃げ出した』のはどこのどいつだったかな？三宅くん？」

そして、逃げんなよ、と言ってコロシアムにむかった霧間。

「お前っ…！後悔させてやる！」
三宅は軽く舌打ちをしたのち、霧間の後を追った。
嵐が去ったような現場に取り残された、岩國と佐川。
なかなか動こうとしない佐川に岩國は言った。
「なぁ、お前は行かねぇのか？」
それに対し、佐川はすべてを見透かすような瞳を岩國にむけて言った。
「行きますよ。…『計画』ってものがあるんでね。」
そして佐川は不敵に笑い、どこかへ行ってしまった。
岩國がふと横を見ると、そこには藍川澪美の姿があった。
「ご、ごめんなさい、気になったからつい立ち聞きしてました…。」
彼女は岩國に近づき、申し訳なさそうに言った。
「あぁ、それは別にいいんだが…。」
「はい…私も少し不安です…。」
二人の考えは一致していた。
きっとあの男たちのせいで、霧間麻人に何かがおこる、ということだ。

少し考えたのち、口を開いたのは藍川だった。

「わ、私、後ろをつけて見てきます！」

「じゃあ俺も行くぞ！？」

席から立ち上がろうとする岩國。
しかしそれは藍川によって防がれた。

「ダメですよ！相手に顔を見られてる浩也君が行ったら、確実に警戒されます！もしそれで敵の数でも増えたら大変です！私はさっき、顔を見られない位置にいたので、私なら大丈夫です！」

藍川は珍しく大きな声を上げた。
それにたいして、クスッと笑った岩國。

「お前もそんなしっかりしたこと言えるんだな。」

「余計なお世話です！」

藍川が顔を赤めて言い返す。
が、すぐに真顔に戻し、言葉を続けた。

「絶対に深月ちゃんには言っちゃダメですよ？深月ちゃんが麻人君の方にむかったら、また『前みたいな印象』を与えますから。」

前みたいな印象、とは前回の霧間と三宅が対面したときに、楠原が来た際、三宅がもった霧間の印象だ。

「わかった、何かあったらすぐに連絡してこいよ！あと携帯のバイブレータは切っとけ。もしも音がして相手にバレたら元も子もないからな。」

岩國も納得した。

藍川はそれを確認すると小さく微笑み、そして小さな体をくるりと反転させて出口にむかおうとした。

しかし、

「澪美ちゃん！」

岩國がそれを呼び止めた。

「…？何ですか？」

首を傾げる藍川。

岩國には、二人だけだからこそ聞ける質問をした。

「…深月ちゃんほど深くきくわけじゃないけど……契約相手って、何なの？」

それを聞いた藍川は、やはり戸惑った表情を見せ、そして苦しそうな笑顔で言った。

「…いずれ、嫌でもわかりますから、今は待ってくれませんか？」

そう言われた岩國は別にひねくれる様子もなく、ただ、

「わかった。ごめんな、無理言って…。じゃあ、麻人を頼んだ。」

と言った。

それを聞いた藍川はニコッと微笑み、再び足を進めた。

岩國は彼女の小さな背中を見つめながら、あの先ほど見せた表情を忘れられないでいた。

指をかけられた引き金（後書き）

茜空と超能力シャ　の閲覧、ありがとうございます。
黒崎千叉です。

更新が遅くなってしまい、読んでくださっている読者の皆様、すみません。

なるべく更新できるように努力します。

はい、

もう8月も中旬ですね。

梅雨明けだと思ったらもうこんな時期、早いですね。

宿題、終わらさないと…。

はい、本編の方ですが

ここから物語は動き始めます。

これからの展開にも期待していただければ幸いですし、その期待をこえられるように努力します。

それでは体調管理に注意して元気に過ごしてください。

これからもよろしくお願いします。

それでは。

黒崎千叉

闇は少女を飲み込んで（前書き）

少女の暗き過去と未来に光を

闇は少女を飲み込んで

「…誰もいないようだな」

実戦棟二階、『コロシアム』に到着した霧間は、そうポツリと声を漏らした。

恐らく、霧間たちがそうであったように、他の学生たちはランチタイムなのだろう。

霧間は誰もいない空間に少しだけ驚いたが、むしろこんな時間にコロシアムにいるほうが不自然だといえる。

「どうした？怖じ気づいたのか？」

ククク、と嘲笑する金髪の少年、三宅。

「はっ、どっちがだよ」

そんな挑発にも乗らず、霧間はさっさとドームに入り、異世界に移動した。

…逃げるなよ？

そう言い残して。

「ケッ、バカにしやがって！所詮はGランクが！」

そう言って三宅も後につづいた。

二人が辿り着いた場所は、楠原と霧間が戦ったところと同じく荒野

だった。
ただ、楠原の攻撃の軌跡がないため、同じ荒野でも違う場所といえよう。
不意に、三宅が声を上げた。
「この日を待ってたぜ。お前を倒して、この俺が名を上げる日をな！」
「どうでもいいけど、さっさと終わらせようぜ。カレーも残したままなんだ」
三宅とは対象に、面倒くさそうな声を吐く霧間。
そんな霧間に対し、三宅は先ほどと同様に大きな声で言う。
「ふん、そうかい…なら遠慮なくいかせてもらうぜ！」
そう言った直後、三宅の体が赤く光り出した。
熱を帯びているのだろうか、彼周辺の空気はユラユラと揺れている。
それを確認した霧間は、魔力を体に宿した。
少しだけ白くなる視界を通して、赤く染まる三宅を見る。
三宅が口を開いた。
「どうした？こないのか？『火灯しトカゲ』の炎で作った『炎の鎧』だ。うかつには触れられないだろ？ククク…」

彼は自信満々だった。
理由として、『火灯しトカゲ』は、実際のところDランクの人間が契約していてもおかしくないほどの能力をもつ。
そして最も大きな理由は、三宅が霧間麻人の能力を十分に理解していないことだった。
霧間は三宅の言葉に対したリアクションもせず、
「…その程度の炎で満足なのか？」
と、あまりにも自信に満ちていた三宅をバカにするかのように言った。
当然、腹を立てる三宅。
片方の眉を上げ、攻撃に出た。
「クソ、なら喰らいやがれ！『烈火直進』！」
彼がそう叫ぶと、『炎の鎧』から真っ赤な槍のようなものが飛び出し、周りの空気をゆがませながら、霧間を突き刺そうと宙を駆けた。
直撃すれば、恐らくただじゃ済まない。
しかし、霧間は全く微動だにせず、左手を前に出してその炎を止めた。
彼を喰らうはずの槍は、今獲物の手のひらに動きをなくされている。
「な、何だと…？」
焦りを隠すことがでかない三宅。

攻撃直前の自信が大きかったため、その反動も、それを上回るほどの大きさがある。

そんな彼を惨めに思った霧間は、槍を手で止めながら言った。

「なぁ、俺は普段、お前らが逃げ出すような『Aランクの化け物』とやりあってんだよ。こんなちんけな攻撃、蚊のほうがよっぽど厄介だぜ」

霧間が槍の尖端を握ると、炎の槍は原形を留めることを忘れ火の粉となって地面に散らばり、そして吹き抜けた生暖かい風がそれをどこかに消し去った。

それを見ると、霧間は三宅に視線を移す。

「じゃあ…次は俺の番だよな？」

そう言うと、霧間は一瞬で三宅に詰めより、そして

「っらぁ！」

炎を纏った体を思いきり殴った。
拳と鎧の間に強烈な火花が散る。
そしてそれが霧間に降りかかろうとするが、それは彼に届く前に纏った魔力に掻き消される。

「砕けろぉ！」

霧間はそう叫び、そしてさらに力を込めた。
すると、三宅の体を守っていた炎の鎧は、まるで風船が破裂するか

のように火花となって風に消えた。
その反動で、地面に倒れる三宅。

「なっ！？…クソ、何なんだよお前は！そして何なんだ！？その契約相手は！！」

冷や汗と焦りのもと、三宅は霧間に言った。

霧間は、すでに能力が解け、尻餅をついて怯える金髪の男を上から見下ろしながら言った。

「そんなもん、俺が一番知りてぇよ…」

霧間が三宅に鈍い音を響かせ、止めを刺したのはそれから数秒とかからなかった。

藍川澪美は、実戦棟に入っていったメガネの男、佐川を追って建物内にいた。

———たしかコロシアムって言ってたから、二階かな？

彼女は佐川を追うべく、階段に差し掛かった。
エレベーターを使うと音がするため、追跡がバレる恐れがあるからだ。
一定のリズムを刻みながら、階段を一歩一歩昇る。
その時に発せられる、靴と床が擦れる音が気になるほど実戦棟内は静かだった。

藍川は踊り場に差し掛かろうとしていた。
心臓の鼓動は早くなり、しかしながら足取りは重くなる。
この階段には窓がないため、それが彼女の心拍数を上げる原因になっていた。

そんなとき、

「いいか、言った通りにするのですよ？」

藍川澪美の耳に、佐川らしき人の声が入った。
彼女はその言葉から、佐川は誰かに話しかけている、すなわち一人ではない、ということを把握した。

藍川は階段の上から聞こえる声に耳を傾ける。

「三宅は必ず負ける。最初から勝てるなんて、これっぽっちも思ってません。だから、彼は囮です」

藍川は衝撃の事実に目を丸めながらも、彼の言葉を聞いた。

「あの霧間という男は、最低ランクの力ではない。普通に戦っても、僕たちが勝つのは不可能でしょう。だから、『彼が異世界から帰ってきた瞬間』を狙ってください。いくら霧間でも、そんな不意討ちには対処できないでしょうから。
…僕たちFランクにとって、Gランクは敵です。その中の最強と呼ばれる芽は、摘み取らなければいけません。いいですね、あなたたち二人で、確実に仕留めてください」

藍川はそんな佐川の言葉から、敵が三宅を含め、四人いること、そして霧間麻人の身が危ないことを理解した。

「それでは僕はコロシアムに行ってきます。三宅がやられ、霧間がこちらの世界に送還されそうになったら知らせますので、上に来てください」

佐川はそう言い残し、階段に音を響かせながら消えていった。

———どうしよう、麻人君が……と、とりあえず、浩也君に伝えないと…！

藍川は携帯を取りだし、岩國への連絡を試みた。

がしかし、ここで重大なミスをしてしまう。

「あっ…」

あまりの緊張のせいからか、携帯を手から落としてしまったのだ。

当然、階段には床に何かをぶつけたような音がこだまする。

いくら携帯をマナーモードに設定し、さらにバイブレーションも作動しないようにしても、これだけの音が鳴ってしまえば元も子もない。

「誰だ！？」

藍川は男の声を聞いた。

そして足音が近づいてくるのを肌で感じる。

彼女は落とした携帯を拾おうと手を伸ばす。

しかし、その細く白い腕はゴツゴツとした手によって動きを止められてしまった。

「キャッ！」

慌てふためく藍川。
しかし、男のもう片方の手が彼女の口を塞ぐ。

「あれぇ？こんな所に一人で何してるのかな？お嬢さん」

藍川を捕えていない方の男が言った。

「ってかこのコ、Gランクの奴じゃないか？この水色髪、見たことあるぜ？」

そしてニヤニヤと口元を吊り上げ、男は藍川に近づく。
そして取り出した物は

サバイバルナイフ

「可愛い顔してるじゃん。…なぁ、最下位ランクって、やっぱ『奴隷』だよな？ちょっと遊ぼうぜ？」

それを藍川の首筋に近づけ、男は言った。
彼女の瞳は恐怖に染まっている。

拘束していた男は一旦それを解き、そして藍川の腕を再び掴み、自由を奪った。

彼女は身動きをとることができない状態だが、自由になった震える口を開いた。

「お願い……やめて……！」

それを聞いて笑う男二人。

「やめて、だってよ！自分からついてきておいて！そんなに俺たちが怖いのか？カカカ！」

男の言葉を耳にし、藍川はますます顔を青ざめさせる。

そのとき、男たちは彼女の異常に気づかなかった。

全身に鳥肌を立たせ、ガタガタと震える彼女を、ただ怯えてるだけと解釈していた。

藍川澪美の瞳の中に映る、楠原が見た『青い球体』が揺れていることも見ずに。

彼女は震える声を出す。

「違う……違う違う！怖いのは……私…自身……！」

それを聞いた男二人は不思議そうに顔を見合わせる。

藍川は狂ったように続けた。

「やめて……血を見せないで……私の血を流さないで…！！あんな惨劇はもう……嫌ぁァ！！！」

さすがに男たちも彼女に対して恐怖を抱いた。

だが同時に、生まれてしまった好奇心。

この女の子、血見たらどうなるのかな？

そして、衝動に駆られた男がナイフを突きつける。

「こいつ、血見たら気絶しておとなしくなるんじゃねぇか！？」

そう言ってナイフを突き立てた

わめく少女

笑う男

そして

揺れる『瞳の中の青い球体』

…次の瞬間

「あっ……」

藍川は自分の腕に伝う一筋の赤い鮮血を見た。

藍川の、少女の時が止まる。

床に滴る赤い滴を見ながら、流れ出る鮮血を見ながら、少女はフリーズした。

「おいおい、どうしちゃったのお嬢さん。何とか言ってみろよ！」

ニヤニヤしながら、血のついたナイフを持った男が、少女の顔に手を伸ばす。

しかし、俯く少女の顔に恐怖の色など微塵もなく
…何もカも考えられナクなっテイた

そして次の瞬間、

「…な、何だ！？この匂いは…」

男たちは驚き、周りを見渡し始めた。

無理もない。
階段の踊り場には『血の匂い』が充満していたからだ。
突然のできごとに焦る男たち。

と、そのとき、

「ウ、ウワァッ！」

藍川を拘束していた男が声を上げた。

「ど、どうしたんだよ！」

冷や汗をかきながら尋ねるもう一人の男。

手を放した男は目の前の少女を指差し、言った。

「いや…こ、こいつ…」

刹那、

「フフッ、フフフ…」

「笑ってやがる…！！」

「フフフフッ、ァッハハハハハハハハ！！」

藍川の笑い声が階段に響いた。
しかし、それはいつもの可愛らしい声ではなく、
不気味な、興奮したような狂気の声。

「な、なんだよ！こいつ！」

「気持ち悪ぃ！おい！ずらかるぞ！！」

男たちは駆け出そうとした。
一刻も早く、この少女から離れようとしたのだ。

しかし、動けない。
男たちは、それぞれ片手ずつ、藍川に掴まれていたのだ。

そして

「ハハッ、ねぇねぇ」

「ヒィッ！」

怯える男を無視し、俯いた顔を上げて藍川澪美は言った。

「『ナイトメア・ナイフ』って知ってるぅ？」

その瞳の奥の球体は真っ赤に染まっており、そしてもう一度だけ少女の狂気の声が階段に響いた。

迫る影には気づかずに

眼鏡をかけた男であり、霧間麻人を攻撃しようとしている男の一人である佐川は、少し重い扉を開いてコロシアムに入った。

そして、半球状のドームのそばで尻餅をついている金髪の男、三宅を見つけた。

霧間にあっけなく敗北を許した彼はこちらの世界に強制送還されたのだ。

その表情は強張っており、別の世界にいる霧間に脅えているようだった。

「……やはり、彼には勝てませんか…まぁ、期待はしていませんでしたが…」

ふぅっ、と小さく息を吐き出し、少し呆れたように、しかしながら計画通りにことが進んでいることに、少し満足げな笑みを浮かべた。

「お、おい！佐川！あんな能力使うやつが、何でGランクなんだ！？軽くCランクはあってもおかしくないじゃないか！！」

少し取り乱しながら叫ぶ三宅。

それに対し、佐川は眼鏡を人差し指で上にあげ、三宅とは対照的に冷静に答えた。

「今さらですか？彼には我々Fランクを軽く超える力があります。さもなくば、いくら楠原深月がいるからと言っても、とうの昔に殺

されているでしょうから」

これまで、霧間に『勝負』をふっかけた相手は、Ｆランクの男子生徒のほとんどだ。

佐川が言ったように、霧間麻人はやすやすと殺されるような人物ではない。

それは彼が使う独特の『魔力を宿す』という能力があるからかもしれないが、彼自信が昨日の戦いで見せたような、『体術のキレのよさ』も関連しているだろう。

そもそも、いくら人数が多いとは言え、Ｆランクの生徒で、三宅のように霧間のことをほとんど知らないことは、他に何を知っているのか、と訪ねたくなるようなことなのだが。

「クッソォ…どうすんだよ！あいつはもうすぐ帰ってくるぞ！？その時は俺たちが何をされるか…」

「ご心配なく」

焦る三宅の言葉を半ば遮るように佐川が言った。

そして困惑する三宅に、佐川はさきほど階段で話していた『作戦』を伝える。

無論、三宅は囮だった、ということは隠した。

それを聞いた三宅は、まるでこれまでの憤りを自分自身から搾り取るように、ニヤッと表情を緩めた。

「これで…あいつも終わりだな…クク…」

「いくら霧間麻人とはいえ、これには対応できないでしょう。…さぁ、僕は待機させている二人の刺客を呼びに行きますか」

三宅には見えなかったが、佐川も同じように笑っていた。
おそらくFランクの生徒なら、ほとんどが彼らのような表情になるといえる。
それほど、Fランクの生徒は霧間麻人を『目の上のたんこぶ』のように見ているのだ。

そして佐川はコロシアムの扉を開けっぱなしにしたまま、軽い足取りで階段へと向かった。

コロシアムには、三宅一人が残る。

「ククク…これで霧間も終わりか…。あとのGランクの奴等はザコばかり…いや、岩國とかいうやつは警戒だな。まぁ…『嫌われもの の大将』が死んだ時点で、潰すのも時間の問題だ…」

三宅はいまだに笑っていた。
さきほどよりも、すごく満ち足りたような不気味な顔で、『笑顔』と呼ぶにはあまりにも抵抗がある。

三宅は、すでに勝利を確信していた。

しかし、そのとき、

「う、うわぁぁぁぁ！！」

「！？」

笑い声とはかけ離れた佐川の悲鳴が轟いた。
三宅は少し固まったが、重い足取りで、眉間にはしわをよせながらコロシアムを出た。

すぐに目に写ったのは、階段の踊り場、佐川と男子生徒二人が、作戦の最終確認をした場所を指差すように、人差し指を下にむける佐川の姿だった。

普段の少しクールな彼からは想像できないほどの脅えようで、何よりも顔が青ざめていた。

三宅は佐川に声をかける。

「おい！どうしたんだ！？」

佐川は顔を引き吊らせながら三宅を見て、そして震える口を開いた。

「あぁ、あ、あれ！あれ！！」

ただひたすら踊り場の方を指差す佐川。
三宅は不思議そうな顔をして、その人差し指の先を覗きこんだ。

そして、その光景に絶句する。

「な……何なんだよいったい…！！」

二人が見たのは、踊り場を埋めつくす血だまりだった。

黒っぽい赤が、その場を支配している。
血は踊り場の淵から下の階へと滴となり垂れ、その勢いは止まることはなさそうだ。

そして、その地獄に沈む二人の学生。
おそらく、この膨大な血は彼らの体を巡っていたのだろう。
出血、いや、流血により彼らの体は真っ青なはずだが、それを許さない血の量が二人の体を染めている。

いくら人が死ぬことに慣れた学生でも、彼らがまだまだ経験不足のFランクであるからかもしれないが、この光景はあまりにも残酷すぎた。

「う、うわぁぁ…！」

恐怖で脚がすくみ、腰を抜かす三宅。
佐川も同様に、震えながら壁に身を預けている。
彼らにさきほどのような笑みは無く、目の前の『地獄絵図』にただただ怯えていた。

と、そのとき

「…おい、お前ら何してんだ？」

ポリポリと頭をかきながら、異世界から戻った霧間麻人がコロシアムから出てきた。
戻ってきたときに相手がいなかったためか、少し不機嫌そうな顔をしている。

霧間は二人に近づくと、彼らが『例のこと』を話す前に何かを察知

した。

「……血の…匂い？」

そう呟くと瞬時に霧間は駆け出し、そして踊り場という名の地獄を見た。

霧間は一瞬眉間にしわをよせたが、すぐに冷静になった。

そして一歩一歩、階段を降りる。

彼は、一人が俯せで倒れ、もう一人は仰向けになっているのを確認した。

その後、血の飛び散っていないところの限界まで下った彼は、その脱け殻となった二人をじっくりと見た。

何度も人が死ぬ瞬間を見てきた霧間は、こういったときに感じる恐怖を失っている、と言っても過言ではない。

しばらく殺戮の現場を見つめ、そして彼はあることに気づいた。

「……外傷が…一つも無い…」

そう、倒れる二人に傷のようなものなどなく、まして服さえも破れたり切れたりしていない。

ここで、疑問点として浮かび上がるのが、この血だ。

どのようにして流血したのか。

霧間は、吐血、という可能性も考えたが、これだけの量を吐き出し、なおかつそれを撒き散らすのは不可能だ、と彼は推測した。

それに吐血ならば、生きている三人はもっと鼻をつんざくような異

臭に顔をしかめているだろう。

「とりあえず……先生頼みだな」

霧間はそう呟いて、階段を昇ろうとした。

大抵の場合、学校の敷地内で人が死んだりした場合は、教員が『遺体処理施設』に連絡を入れ、そしてその施設の人が現場に出動し、作業を行う、といった流れになっている。

――――いつも通り連絡するか…

霧間は慣れた手つきで携帯電話を操作する。

しかし、ふいに踊り場に見えた『物』に、彼は目を疑った。

それは、血の中に見えた、携帯電話。

そう、藍川澪美の携帯電話だった。

そして、その付近にうっすらと残る、小さなシューズの跡。

「…いや、まさかな、ハ、ハハハ…れ、藍川さんがこんなこと、するはずないだろ…」

さすがの霧間麻人も困惑した。

浮かんでくるのは普段の藍川澪美。

ドジで、おっちょこちょいで、世話がやけて、でも優しくて、笑顔が明るい、彼女の姿。

霧間は教員に繋がる番号を消し、そして電話帳の『藍川　澪美』と

表示された場所にカーソルを合わせる。

———信じてる

そう自分に言い聞かせ、霧間は通話のボタンを押した。
しばらくの間、とはいえ数秒間、接続するための音がなる。
彼にとって、その時間はあまりにも長く感じられた。

そして、表示される、『呼び出し中』の文字。
彼の耳元では、プルルルル、というお決まりの音が流れる。

霧間はとっさに血の中の携帯電話を見る。

……微動だにしない。
音を発さないどころか、振動すらしない。

霧間はそれを見ると小さく息を吐き、座り込みたい気持ちを抑え、
エレベーターで下に向かうべく、階段を駆け上がった。

「ハハ、なに考えてたんだよ…藍川さんがそんなことするわけないよな！さぁ、とりあえず先生のいる場所に向かわなきゃ！」

霧間はただ前をむいて駆けた。
悲しくも、その足取りは軽かった。

彼がいなくなった踊り場

…皮肉なもんだな

あいつを助けるために、藍川澪美は携帯電話を『サイレントマナー』
にしたのに、それがあいつを裏切ることになった……。
やっぱり…
信じるなんて、何がいいことなのかねぇ…
傷付く前に…

傷付けてやればいいのに

…少年のような声が、小さく響いていた。

迫る影には気づかずに（後書き）

更新が遅くなってしまい、本当に申し訳ありません。

これからもよろしくお願いします。

黒崎　千叉

開く距離は想いと共に（前書き）

少女の暗き過去と未来に光を

開く距離は想いと共に

教員棟は学園のほぼ中心にある。
レンガ造りの建物で、新しい学校のはずなのに何故か年期を感じさせる雰囲気を漂わせる。
玄関は職員用の一箇所しかないため、その大きな建物からは少し違和感を感じさせている。
見たものはその印象から忘れることはほとんどないだろう。

「…と言う訳なんです。」

霧間麻人が自分の見たものを話したのは、二階にある『第二学年担当教員室』の会議室だ。
職員室に入り、一番近くにいた教師に話しかけたところ、ここに連れてこられたというわけだ。
入学してから間もなくのころ、最初に連れられたときは麻人も少し挙動不審だったが、今となっては慣れたもので堂々としている。

ネクタイの横に見えるネームプレートに、横谷、と書かれたその男性教師が霧間に言う。

「なるほど、つまり被害者は二人、そして殺したと思われる本人は不明。というわけですね？」

彼はコクリと頷く。
ただ、シューズの跡の件と携帯電話の件について、彼は何も言わなかった。

もしも藍川澪美が…というわけではなく、そういったことはもう専門家に任せよう、と少し前の騒動で感じたからである。
霧間は、後はよろしくお願いします、と言って席を立ち去ろうとした。
慣れてはいるものの、この部屋の空気が何故か苦手だったからだ。
しかし、その瞬間に会議室の重いはずのドアが、弾けるように開いた。
「麻人！大丈夫！？」
慌てて飛び込んできたのは、榊山高校2年Aランク、楠原深月だった。
顔には焦りの色が見える。
そしてその後に続いて部屋に入る金髪の少年、岩國浩也。
ふと目があう霧間。
そして岩國は霧間の周りを目だけで見ると、なぜか下を向いていた。
――？
霧間がそんな彼の行動に疑問を持っていると、ふいに楠原が霧間に駆け寄り、そしてバッと彼の手をとった。
彼はさすがに驚きをかくせられない。
普段は強がったりして、きつい言葉を言ったりする彼女だからなおさらだろう。
「な、なんだよ深月、いきなり…。」
「いきなりはこっちのセリフよ！バカ！なんで何も言わないで行っちゃうのよ！せめて一言くらい言ってもいいじゃない！浩也君は浩

也君で何も教えてくれなかったし！」

吐き出すように叫ぶ楠原。
霧間はふと、彼女と目が合った。
彼の目が映した彼女の目には、涙が溜まっていた。
それがよほど心配していたことを物語っている。
いくらプライドのために言わなかったとはいえ、霧間麻人には『一人の少女を傷つけた』という罪悪感が生まれた。
彼は、普段とは全く違う楠原への驚きなど忘れ、視線を斜め下に落としながら、

「…悪かったよ。」

楠原だけに聞こえるほどの大きさの声でそう呟いた。
彼女はいまだに霧間の手を離そうとはしない。
霧間はそんな彼女の手がかなり小さなことを実感していた。
Aランク、学年トップクラスほどの実力、強力な魔力の持ち主。
社会からはそう見られている彼女も、今、彼の前では少し強がりな女の子。
まだ十六歳の女の子なのだ。

「…ばか……心配したんだからね……。」

楠原もまた、彼にだけ聞こえるほどの消えていくような声で呟き、そしてそっと寄り添った。
幼なじみで、ずっと隣にいたわけだが、今は違う距離の近さを感じている。
そして、

―――守ってやりたい。
霧間麻人の心に、初めて楠原に対するそんな気持ちが生まれた。

「…えぇと、お取り込み中のところ悪いんだが…。」
声を発したのは、同じ部屋にいるはずなのにすっかり置き去りにされた岩國だった。
寄り添っていた楠原は顔を真っ赤にし、そして霧間からすぐさま距離をおいた。
そして軽く咳払いをし、

「何よ？」

普段通りに答えた。

「いや、深月ちゃんじゃなくて、麻人に用があるんだけど…」
「…え？俺？」

いきなり話を向けられて少し驚く霧間。
彼には先ほどの彼女との行為に対する羞恥心は無いようだ。
が、霧間とは対照的な楠原は、恥らう気持ちを抑えて返答したのに、用件の対象が自分ではなかったことについて新たな羞恥心が生まれていた。
その場にいられなくなったのか、すっかり部屋の隅で体育座りをしている。

「…まぁ、深月ちゃんは置いといて……麻人、大事なことを聞いて

いないんだが…」
「ん？何だ？」
一瞬訪れた和やかな雰囲気を一変させる二人。
岩國がゆっくり口を開いた。
「…澪美ちゃん、見なかったか？」
「……え？」
少しだけ、霧間の顔が青ざめる。
彼は岩國に疑問を投げ返した。
「お前らといなかったのか…？」
「実は…」
岩國はその場にいた彼女が霧間がいなくなった後、密かに彼を尾行したことを説明した。
それを聞いた霧間は顔を青ざめさせた。
そして、ゆっくりと自分が見たもの、そして自分がとった行動、すなわち『藍川澪美の携帯電話に発信した』こと、そして彼女の携帯電話はなんのアクションも起こさなかったことを話した。
…が、霧間の話を一通り聞いた岩國は苦虫を噛み潰した。
「なぁ麻人…大事なこと忘れていないか？」
「な、何だよ…」
不安が大きくなる霧間。
そして、岩國は不安そうな目をして言った。

「澪美ちゃんは…電話に出たのか？」
「…！！」
霧間の体から冷や汗が染み出した。
そう、彼は本能的にわかったのだ。
『まだ安心はできない』と。

音も、バイブレーションさえも切っていれば、電話に出れなくてもおかしくはない。
しかし、彼女はすでに目的、そう、『霧間麻人の尾行』という目的を終えているはずだ。
ならば、着信履歴から霧間にかけ直すというのが普通だろう。
しかし、霧間の携帯電話は着信どころか、ここ数時間光さえも放っていない。
そして、安心できない最大の理由は『藍川澪美の行方がわからない』ということだ。

「浩也、深月……藍川さんを探そう」

彼は少し焦りながら、その場に立ち尽くしていた二人に言った。
二人は決意に満ちた、しかし不安で覆われた目で霧間に同意した。

しかしそのとき、部屋のドアが不意に開いた。
入ってきたのは、学校の職員と思われる男だった。
しかし、着用しているのはスーツなどではない。
まるで宇宙服のような、ごわついたモノを着用している。
そう、この服を着ている人間こそ、死体などを処理したりする係りの担当なのだ。
衣服がごついのは、もしも処理の最中に『対象』を襲った人間がそばにいて、攻撃をうけると危険だからだ。いわば防護服のようなも

のといえる。
その男は、霧間が事情を話した教員に言った。
「実戦棟の遺体二名の処理、完了しました」
「そうですか、ご苦労様です」
そう言って、男は去ろうとした。
彼は自分の仕事が完了したことの報告に来ただけで、他にようはないようだった。
…が、
「ま、待ってくれ！」
霧間麻人によって呼び止められた。
男は体を反転させ、そして彼に尋ねる。
「なんだい？」
「あんた、『現場』に行ったんだろ！？なら、携帯電話が落ちてなかったか！？」
霧間は敬語を使うことも忘れて一心不乱に言った。
それを聞いた男は見えない顔を歪ませ、
「別になかったと思うよ？」
そう言った。
その言葉は今の三人を動かせるのに十分すぎるものだった。

「浩也！深月！」
「おう！」
「さっさと行くわよ！」

三人は嵐のように男の横を駆け抜け、そしてその部屋から姿を消した。

一瞬静まり返ったその部屋の静寂を破ったのは、書類の整理をしていた教師、横谷だった。

「…遺体はどんな様子でしたか？」

恐らく、報告所を書くために聞いたのだろう。
普通なら作業の序盤のステップに過ぎず、たいしてこれといったことではない。

しかし、防護服を外した男は顔を明らかにしかめた。

「『ｃａｓｅ．ナイトメア』ですよ…」

そしてそれを聞いた横谷もまた顔をしかめ、まずいな、と呟いて俯いた。

「とれない、とれない！とれない！！とれない！！！」

場所は榊山高校体育館裏。
とある少女、藍川澪美はそこにある水道に自らが着用していた服を、ひたすら春のまだ少し冷たい水の中でこすっていた。
彼女の服装は、上がシャツ一枚と下着、そして彼女の太ももをあらわにするほど短いズボン。

ただ、そのズボンは真っ赤に染まっていた。
そして水音をたて、彼女の手を包んで踊る服も、赤い痕跡が見える。
この血痕は、

「私は……殺した……また……あ…」

実戦棟で殺された少年たちのものだった。

そして、精神状態が全く安定していない彼女に忍び寄る『外部からの』影。

「あれれ？何をしているのかな、お嬢さん？」

近づいたのは男子学生３人。
それも、Ｂランクだ。

彼らはニヤニヤしながら藍川に近寄る。
目的は一つしかないだろう。

「そんな格好しちゃって、誘ってるの？」

藍川に体よりもさらに近寄る男の腕。
しかし彼女は男たちに見つかってから一瞬目を見開いたきり、俯いてしまっていた。

このとき、すでに彼女は『藍川澪美』ではなかった。

「ぎゃあぁぁあぁぁぁぁ！！！」

腕を伸ばした男子学生の悲鳴が轟いた。
彼の腕からしたたるのは、まるで滝のように流れる。
たちまち血液を失った男は、自分の流した血に沈み、動かなくなった。

あまりの出来事に動揺する残りの二名の男子生徒。
なぜなら、死んだ男の腕からは血が流れるものの、『腕はしっかり繋がっていて外傷ひとつなかったから』だ。

そんな彼らの不安を増加させるかのように、

「…ァハハ……」

少女の声が『血』を這って響いた。
顔を引きつらせ、後ずさる二人。
そんな二人を見るかのように、少女は顔を上げた。
その眼の中心には、『赤い球体』がゆらゆらと揺れていた。
そして、

「…ねぇねぇ！遊ぼうよ！！君たち、強いんだよね！？アハハ！！」

狂った笑みのTシャツ姿の『少女』が叫ぶ。

「……鬼ごっこ、スタートだよ！！！」

再会のあいさつは赤く染まり

霧間、楠原、岩國の三人は、他の場所よりを少し広い道が広がる場所を走っていた。
ここは榊山高校中央地点。多くの学生が行きかい、格建物へのアクセスが最も便利といわれる場所だ。
彼らがまずこの場所に来たのも、ここを基点に手分けして藍川澪美を探すためだ。

霧間が二人に言う。

「よし、俺は西のほうを探す。深月は東を、浩也は北のほうに行ってくれ。南は正面玄関があるから、後回しでいい」

それを聞いた二人は了解しそして三人はそれぞれの方角へ駆け出した。
まだ春の冷たい風は、彼らの首筋を突き刺した。

悲鳴と奇声が響いていたのは、体育館裏から北上したところにある、『管理棟』の裏だった。
管理棟とは、おもに高校の電力、水道の使用状況、そして校内にある『歪み』を管理するところだ。
ただ、そこに入ることのできる職員はほんの一握りであり、無論、

学生は立ち入ることはできない。
無理して入ったところで、価値を見出せるようなところでないため、特に困ることなどないのだが。
そんな管理棟の裏を、息を切らした少年二人が絶望の形相をして走っていた。
「な、なんなんだよあの女！！化けモンか！？」
「俺に聞いても、わ、わかんねぇよ！！」
焦る二人。少女、『藍川澪美』に追われている二人。
そんな二人の感情を駆り立てるかのように、少女の無邪気な声が風にのって彼らの耳に届いた。
「化け物ぉ！？アハハ、何言ってるのさ！！君らと同じ、クリーチェストと契約した人間だよ？『この娘』は！！」
声に冷や汗を吹かせる二人。
そして、声の主の場所を確認しようと、彼らは辺りを見渡す。
だが、その行動は二人の心をさらに締め付けた。
「くっそ！何処にいやがるんだよ！！！」
思わず叫んだ男。それもそのはずだろう。
声はまるで耳元で囁かれたほど刃っきり聞こえたのに、『少女の姿かたちは映らない』からだ。
走ることもできなくなり、その場に立ち止まって背中あわせに管理

棟の裏を見渡す二人。
が、いくら探しても姿は見えない。
ただ風が彼らの汗を冷やし、二人に生きているという実感を与えている。
今の彼らにとっては、生きているということが恐怖なのかもしれないが。

そのとき、一人の男が呟いた。

「……血の…匂い？」

「えっ？」

次の瞬間、

「キャハハハハ！上だよ！？」

二人は頭上から声が降り注いだのを感じた。
そして、同時に感じた尋常じゃないほどの『殺気』と『狂気』。
彼らは反射的に前方に飛んだ。
同時に、

「あれれ？仕留めそこたなぁ…」

背後に少女の気配を感じた。
振り返り背後を見ると、音もなく着地したと思われる少女の姿があった。
とっさに身構える。
それを見た少女は微笑を浮かべた。

「フフ、逃げるのは諦めて殺すつもりなのかな？」
男たちは足を震わせながらも、必死に言った。
「なめるな！俺たちだってBランクなんだよ！！お前は少なくてもAランクじゃねぇ！！なら、互角に戦えるはずだ！！」
そして、小さく何かを唱え、手を地面についた。
とたんに、そこには魔方陣のようなものが描かれ、黒く輝くその中から『何か』がゆっくりと姿を現せた。
赤い姿をした、まるで竜に限りなく近いトカゲのようなもの、そして、水色に輝く鱗を纏った大蛇が少女を取り囲むように居座った。
男が叫ぶ。
「どうだ！俺らだって、Bランクではトップクラスに君臨してんだ！侮ってると痛い目にあうぞ！？」
自分の契約相手のクリーチェストを見て強気になる男。
足の震えもいつしか止まっていた。
少女は自分の状況を見渡したあと、
「……ククッ…アハハ……アッハハハハハハハハハ！！！」
空を見上げて笑い始めた。
それに動揺する男たち。
「てめぇ！何がおかしいんだ！！」

それを聞いた笑う少女は、涙目になりながら言った。
「何なの！？それで！？それで『僕』より強くなったつもりなの！？アハハ、侮ってるのはどっちなのかな！！？」
男はさすがに驚いた。
追い込まれたはずの少女が、まだ自分たちのことを攻めている気でいると思ったからだ。
さすがにここまで言われて、男たちも黙ってはいない。
「くっそ、なら喰らえ！！『ボルティアウス』の熱…」
男が契約相手、ボルティアウスに指示をする前に、大きな音がした。
「…なっ……」
全長１０メートルを越すトカゲ、ボルティアウスが尋常じゃないほどの血しぶきを体中から上げて崩れ落ちたからだ。
ただ、今回も体育館裏で殺された男同様、外傷らしいものは一切見当たらない。
鱗のつなぎ目、関節など見境なく赤い鮮血を流して動かなくなるボルティアウス。
召還した男はその血を頭からかぶり、そして再び恐怖がぶり返した。
「な…どういうことだ…？」
恐怖とともに、動揺を伏せられない男。
そして気づけば、
「オイ！お前うしろ！」

「えっ？」

大蛇を召喚した男が震える男に叫んだ。
が、時すでに遅し、

「つーかまえたっ！」

少女が楽しそうな笑みをしながら、手に持っている真っ黒なナイフを男の首筋に突き立てた。

そのとき、もう一人の男は見た。

『少女のナイフが、容易く男の体を貫き、そしてそのまま縦に引き裂いた』のを。
しかし、そこに外傷はない。
ただ、ナイフの軌跡には赤い鮮血が描き出される。
少女は、ズシャリ、と男が音を立てて倒れるのを確認して、大蛇の傍らに立つ男に言った。

「素敵だろぉ？このナイフ…『見えない悪夢（ナイトメアナイフ）』っていうんだ。『切りつけた部分に外傷を一切残さない』。魔力を刃の部分に宿わせてるから、切れ味はこの世の物じゃない。…どう？味わってみる？フフ」

そしてその直後、少女は『消えた』。
男は何とかしようと、大蛇を見た。
が、そこにいたのは大蛇と、探している生き物だった。

「キャハハッ！」

あり得ないほどのスピードで大蛇にまとわりつくようにナイフを突き立てる少女。今回も、外傷は残らない。

しかし、

「せーのっ、どーん！」

少女が大蛇の頭を両足で力いっぱい踏みつけた瞬間、青い液体が吹き出した。

無論、大蛇はもう生きていない。

音もなく、無惨に崩れ落ちる。

しかし、その場所にはもう召喚主である男の姿はなかった。

少女はそれが走る姿を、少し前方に捉えていた。

「く、はぁ、何なんだよあの女ぁ！」

「ククク、楽しいね…まだ鬼ごっこは終わらないんだね！」

少女は無邪気に微笑むと、『姿を消して』男を追いかけた。

岩國浩也は学園内の北にある記念館の近くに来ていた。

記念館にはこの高校の歴史や、歴代Aランクトップの生徒の写真、初代の校長の銅像などがある。

放課後にここを使用する学生は少ないため、人は全くいない。
彼は自分の呼吸音が騒がしく聞こえるほど静かなところにいた。
それが耳につくのは、藍川澪美を探すことの焦りで鼓動が高鳴っているため、かもしれないが。

しかし、そんなとき、

「っはぁ、ゲホッゲホッ…」

記念館の裏側から、一人の男が姿を表した。
それはまるで死から逃げるような顔をしていて、目が映すものすべてを絶望に感じているような雰囲気だった。

男は岩國に駆け寄る。

「た、助けてくれ……女が、女が！！」

岩國は動揺しながらも必死で尋ねる。

「オイ！女ってどんな女だ！？髪は水色か！？背は低いか！？」

しかし、

「がっ…」

彼の質問に答えは返ってくることはなく、聞こえたのは断末魔と血が地面に弾ける音だった。

「な、なんでいきなり…」

岩國は頬をひきつらせた。
自分に近づいてきた男が、いきなり血を吹いて倒れたのだからしょうがないだろう。
しかしその驚愕は、揺らめく影から現れた『少女』の姿を見るなりすぐに絶望に変わった。
「……れ……澪美ちゃん……？」
「あれ？『この娘』の知り合い？」
少女は真っ黒なナイフを片手に、クスリと笑って言った。
そしてその言葉に違和感を覚える岩國。
「お前……澪美ちゃんじゃないな？」
「アハハ、さあね。それよりさぁ…遊び相手がいなくなっちゃったんだぁ。ねぇお兄さん、遊ぼうよ！」
その言葉を聞き、少女の足下に倒れる男を見て一瞬、背筋を凍らせたが、すぐに少女と向き合った。
その少女の真っ白だったはずのシャツは真っ赤に染まっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5019m/

茜空と超能力シャ

2011年2月17日12時23分発行